

武蔵陵墓地内埋蔵文化財調査報告

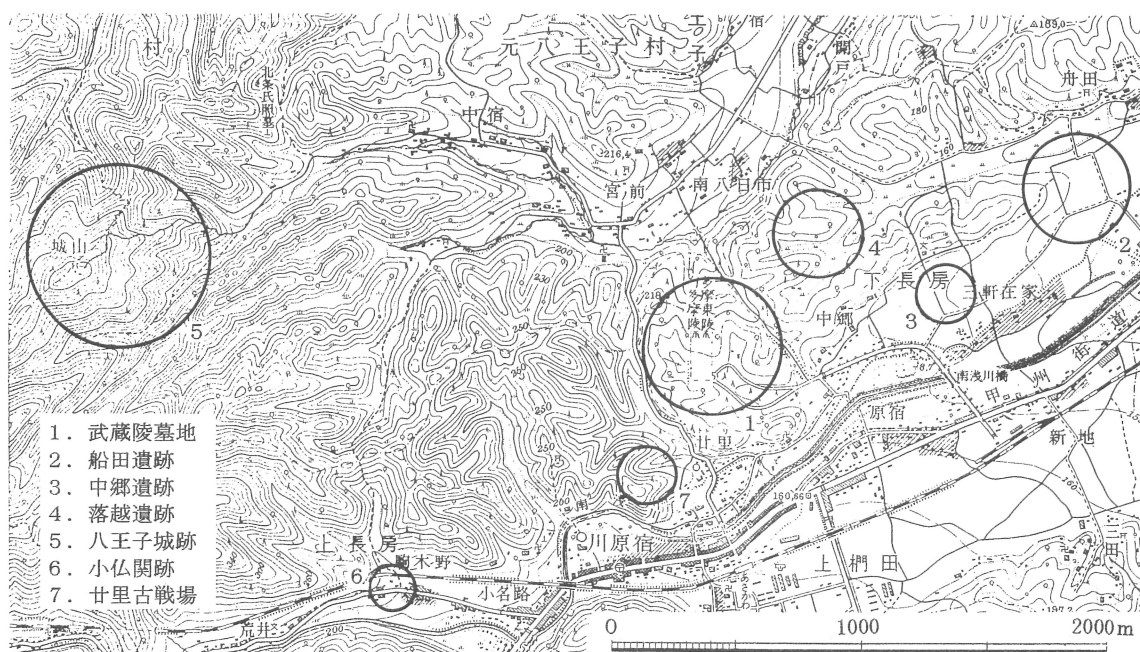
陵 墓 調 査 室

はじめに

武蔵陵墓地は、東京都八王子市長房町に位置する(第1図)。昭和2年(1927)1月3日、宮内省告示第1号をもって、陵墓地として名称、所在及び地域が定められたところである。同年2月8日には大正天皇が多摩陵に、同26年6月22日貞明皇后が多摩東陵に、また平成元年2月24日には昭和天皇が武蔵野陵に斂葬されている。今後とも、引き続き新陵が営建される可能性の高いところである。

その先駆けとなった多摩陵の営建工事中に、横穴と竪穴が発見されたことが報ぜられた⁽¹⁾。その立地からみて、横穴は古墳時代後期の「横穴墓」、竪穴は鎌倉・室町時代の「地下式横穴」と呼ばれる遺構と考えられる。また、周辺地には広範囲にわたって遺跡が存在し、とくに東側には落越遺跡などが近接することもあり、当地にも埋蔵文化財包蔵地が含まれる可能性が考えられた。そこで、埋蔵文化財の有無を確認するとともに、埋蔵文化財であればその時期や性格等を探るため、あらかじめ調査を行った。当陵墓地は約46万haと広大なため、今後も継続して調査を行うこととするが、既往の4次にわたる調査結果の整理を終えたので、以下に報告する。

なお、記述の都合上、陵墓地内の地形等を勘案し、東からA～D地区と4区分した(第2図)。報告に当たっては、地区ごとにその状況と出土遺構などをまとめ、出土品は最後に一項を設けた。



第1図 武蔵陵墓地 周辺の環境 (1/30000)、地理調査所昭和30年作成図面から作図

1 調査の経過と調査地をめぐる環境

(1) 調査の経過

調査の直接の契機は昭和天皇の崩御に伴うものであり、平成元年1月8日～10日にかけてC地区を対象に実施したものである。この第Ⅰ次調査では、若干の落ち込みと磁器片が認められた。

この調査をうけて、昭和天皇斂葬後の1月25日～28日に、C地区の切土をする箇所について第Ⅱ次調査を行った。その結果、落ち込みと縄文土器片1点などが検出された。

この2次にわたる調査の終了後も、工事関係者には遺構・遺物の出土には十分に注意するよう指示していたが、その後の新陵(武蔵野陵)営建工事の竣工までに遺構・遺物とも確認されなかった。そこで、平成2年2月に遺物発見と遺跡発見の通知をしたところ、同年4月、東京都教育委員会から「八王子市 長房町 武蔵陵墓地内 遺跡」との通知を受け、その後周知の遺跡として取り扱われることになった。当庁としても、将来にわたって新陵が営まれるところなので、いずれは調査をすべきものと認識していたが、昭和天皇武蔵野陵が竣工して間もない時期は各種行事や参拝者も多いので、静安を期して調査は控えていた。同陵の5年式年祭も終えた時点で、中長期的な視点のもと将来に備えるため、新陵の営建可能な場所について、陵墓地全体にわたる調査を逐次行うこととした。

このようなビジョンに基づき、武蔵野陵営建に伴う各種行事が一段落した平成8年2月19日～3月28日に、A・B・D3地区で第Ⅲ次調査を実施した。その際、B地区で落ち込みなどを検出しながら時間等の制約によりできなかった遺構の確認と追究のため、同年4月19日～26日にB地区で第Ⅳ次調査を行った。

各調査の際の参加者は次のとおりである。

Ⅰ次 笠野毅・土生田純之・福尾正彦・佐藤利秀、山本忠浩(桃山陵墓監区)・藤林幸祐(月輪陵墓監区)・平木由喜久(畝傍陵墓監区)・浅野良文(古市陵墓監区)

Ⅱ次 笠野毅・佐藤利秀

Ⅲ次 福尾正彦・佐藤利秀・徳田誠志、山浦和幸・村上啓明(多摩陵墓監区)

Ⅳ次 徳田誠志

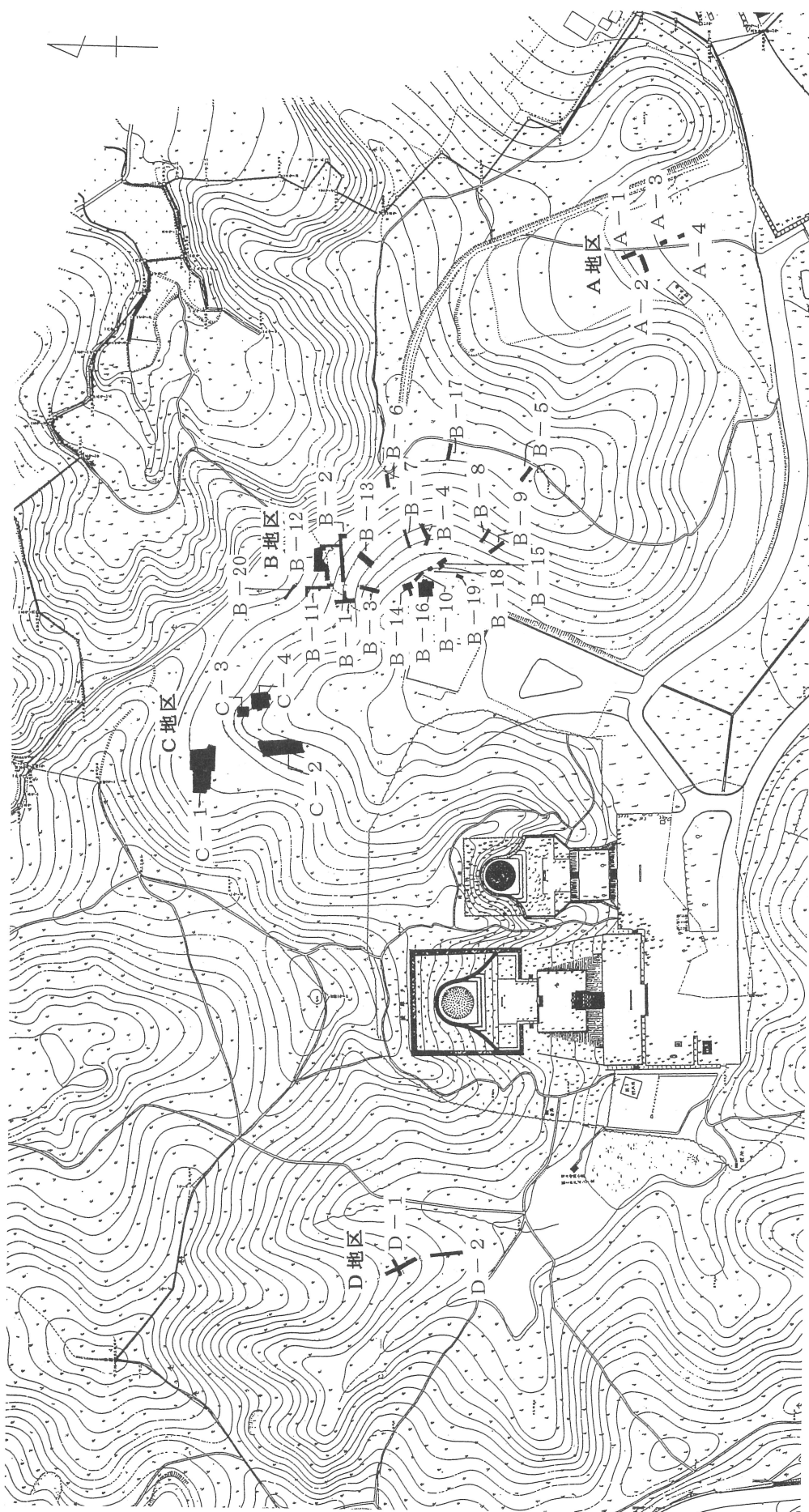
また、調査に際しての基準点の移動・打設については、当庁管理部管理課管財第2系の佐藤孝・高橋勉が担当した。

なお、Ⅲ・Ⅳ次調査に際しては、東京都教育庁可児通広・大谷猛両氏、八王子市教育委員会事務局新藤康夫氏にいろいろとご教示・指導をいただいた。新藤氏には出土遺物に関しても、当地域との関連でご教示いただいた。あらためて謝意を表する次第である。

(2) 調査地をめぐる環境

東京都の西南部に位置する八王子市は、多摩川南岸の八王子盆地とそれを取り囲むように広がる丘陵部と河岸段丘からなっている。丘陵を刻んで多摩川に流下する大小の河川は、当域の地形をより複雑なものとしている。

武蔵陵墓地は八王子市西部にあって、関東山地から東へ延びる丘陵群の一つである舟田丘陵の



第2図 武蔵陵墓地調査箇所的位置図 (1/3000)

南縁にある。この丘陵の南東部の台地上には、弥生時代後期・古墳時代前期の集落跡として著名な船田遺跡が立地し、ここでは縄文時代各時期の良好な土器群も確認されている。その西側には中郷遺跡や落越遺跡⁽²⁾が知られている。

中郷遺跡は縄文中期・弥生後期を主体とし、住居址 5 棟ほかの遺構が検出されている。また、落越遺跡では大規模な発掘調査が実施された結果、縄文時代早期から中世頃に至るまでの良好な遺構・遺物が認められた。落越遺跡は尾根筋を挟んで武蔵陵墓地と対峙する関係にあり、今回の調査で検出された遺構・遺物の性格を考察するうえで、欠かすことのできない遺跡である。

本陵墓地と中央自動車道を挟んでは、戦国時代に北条氏照が拠った八王子城跡があり、土塁・石塁・空堀などをとどめている。近年の調査により多くの遺構が検出され、併せて整備事業が進行中である。

以上、本陵墓地の位置する舟田丘陵近隣の遺跡を垣間見てきた。鎌倉古道が陵墓地付近を横走していたとの伝承もあり、八王子城やその出城と考えられている小野田城跡、その周辺の小仏関跡(江戸時代)や初沢城跡などの存在も勘案すると、当域は軍事的要衝であったこともすでに指摘されている。

2 調査箇所の概要

(1) 基本的層序

調査地における基本的な層序は以下のとおりである。

I 層 表土。黒色の腐植土。

II 層 自然堆積層。黒色系の粘質度の比較的高い土。スコリヤの量により、さらに分層が可能である。

III 層 木根等による攪乱層(IIIa)、近年の大きな掘削による攪乱層(IIIb)、盛土層(IIIc)。
IIIc層には暗茶褐色土、黒色土、黄褐色ロームなどをブロック状に含む。礫や炭化木材、さらにはビニールが含まれている箇所もあり、一気に盛り上げたと思われる。

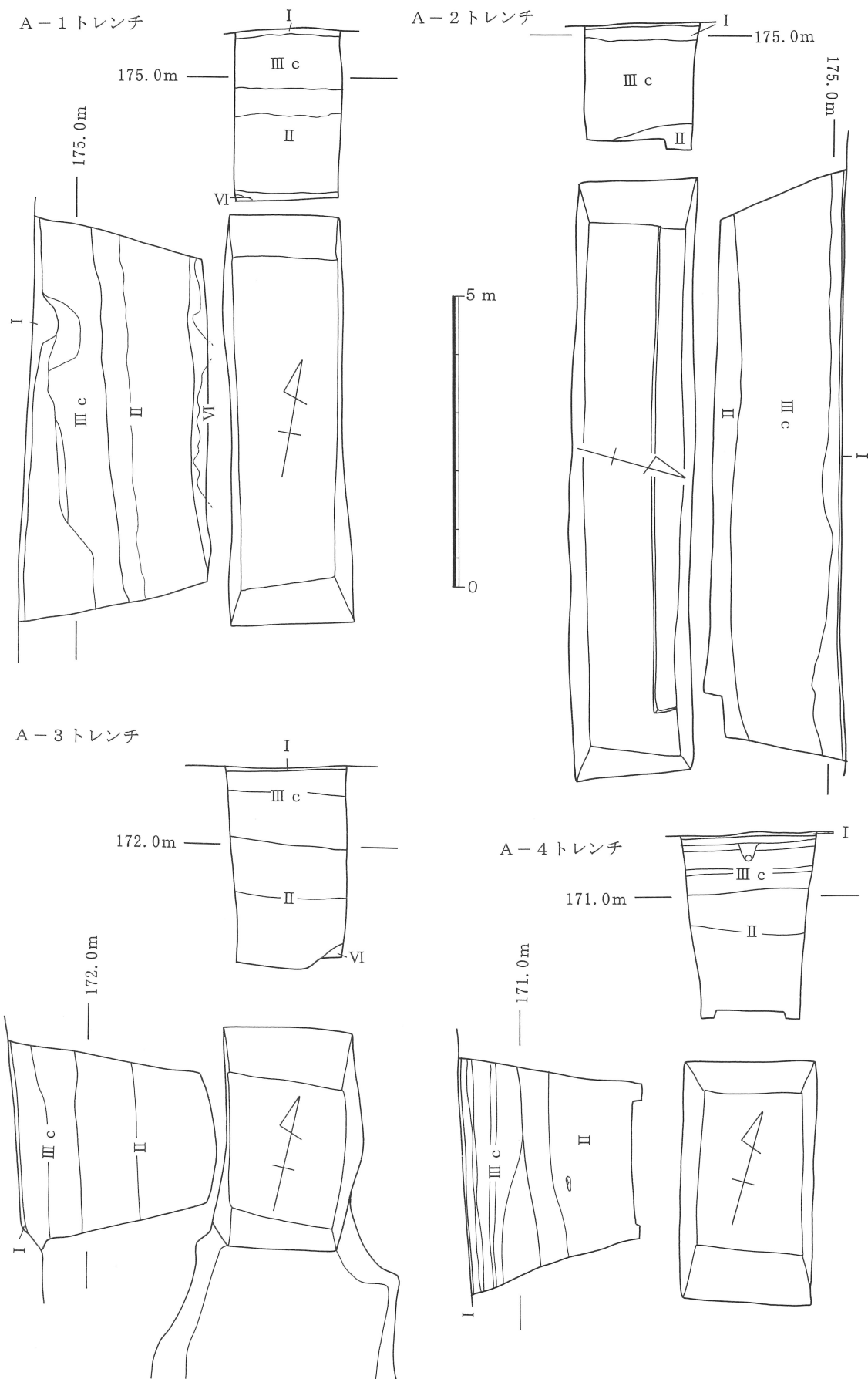
IV 層 暗褐色土層。少量の赤色スコリヤを含む。比較的柔らかく、粘性もあまりない。B地区の一部で認められ、富士黒色土(富士テフラ)に対比できると考えられる。弥生時代中期前半の土器群(須和田式)を包含する。

V 層 いわゆるソフトローム層(Vb)。粘性は比較的強い。その上面に、大粒の赤色スコリヤを含む粘性の弱い漸移層(Va)が、認められる箇所と認められない箇所がある。

VI 層 いわゆるハードローム層で、硬質で堅く締まる。A・B地区の一部では固結寸前の岩ともいえるべき状況を呈していた。

(2) A地区の概要

本地区は陵墓地の東端にあたる。昭和3年(1928)に測量し、翌年に補測した陵墓地形図に拠れば、両端を南に延びる丘陵に挟まれた緩やかな谷地形であることがうかがわれる。しかし、各御陵の営建時には、整地して現場事務所・資材置き場等として利用されたこともあって、今回の調査時には段差を伴い、段上は平坦面をなしていた。それぞれの平坦面に計4箇所のトレンチを設



第3図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(1)A地区(1/100)

けた(第2図)。

A-1・2トレンチ(第3図) 最上段にあたる箇所である。2箇所にトレンチを設定した。いずれも、0.9~1.9mの近年の厚い暗茶褐色土(IIIc)の下位に黒色土(II)を認めた。II層は谷筋に沿った自然堆積層であろう。南方向および西方向にかけて緩やかに傾斜しており、その上にIIIc層が南側と西側がより厚く盛土されていることが知られる。A-1トレンチでは、II層は厚さ1.4~1.7mを測り、南側に緩傾斜する上面に鉄分の集積層をとどめる強く締まった地山(VI)上になっている。遺構は検出されなかったが、II層から縄文中期(五領ヶ台式)の土器小片2点が出土している。

A-3トレンチ(第3図) A-1・2トレンチ設定箇所より約2m低い地に設けた。層序はA-1トレンチと共通する。深さ3.5mまで掘り下げたところ、東北隅の一角でのみ固結寸前の堅い地山(VI)が確認された。西側に急傾斜していることが注目される。遺構・遺物は認められなかった。

A-4トレンチ(第3図) 最下段に設けたトレンチである。該地から陵墓地正門にかけては、緩やかな下り勾配をなしている。深さ3.2mまで掘り下げた結果、暗茶褐色土(IIIc)の下位に泥炭状の黒色土(II)を認めたものの、湧水のため地山の検出には至らなかった。遺構・遺物は出土していない。(福尾 正彦)

(3) B地区の概要

B地区は南西方向に開けた緩やかな谷地形を示し、陵墓地内では比較的平坦地も多く、遺構・遺物の存在が予想されたことから、合計20箇所にトレンチを設けて発掘した。

B-1トレンチ(第4図) 平均深さ1.0mで黄色ハードロームの地山(VI)を検出した。北壁から2m付近で近年の作業道路が検出され、付近の地山もかなり削平されているものと思われる。トレンチ中央付近で土坑1基が検出された。

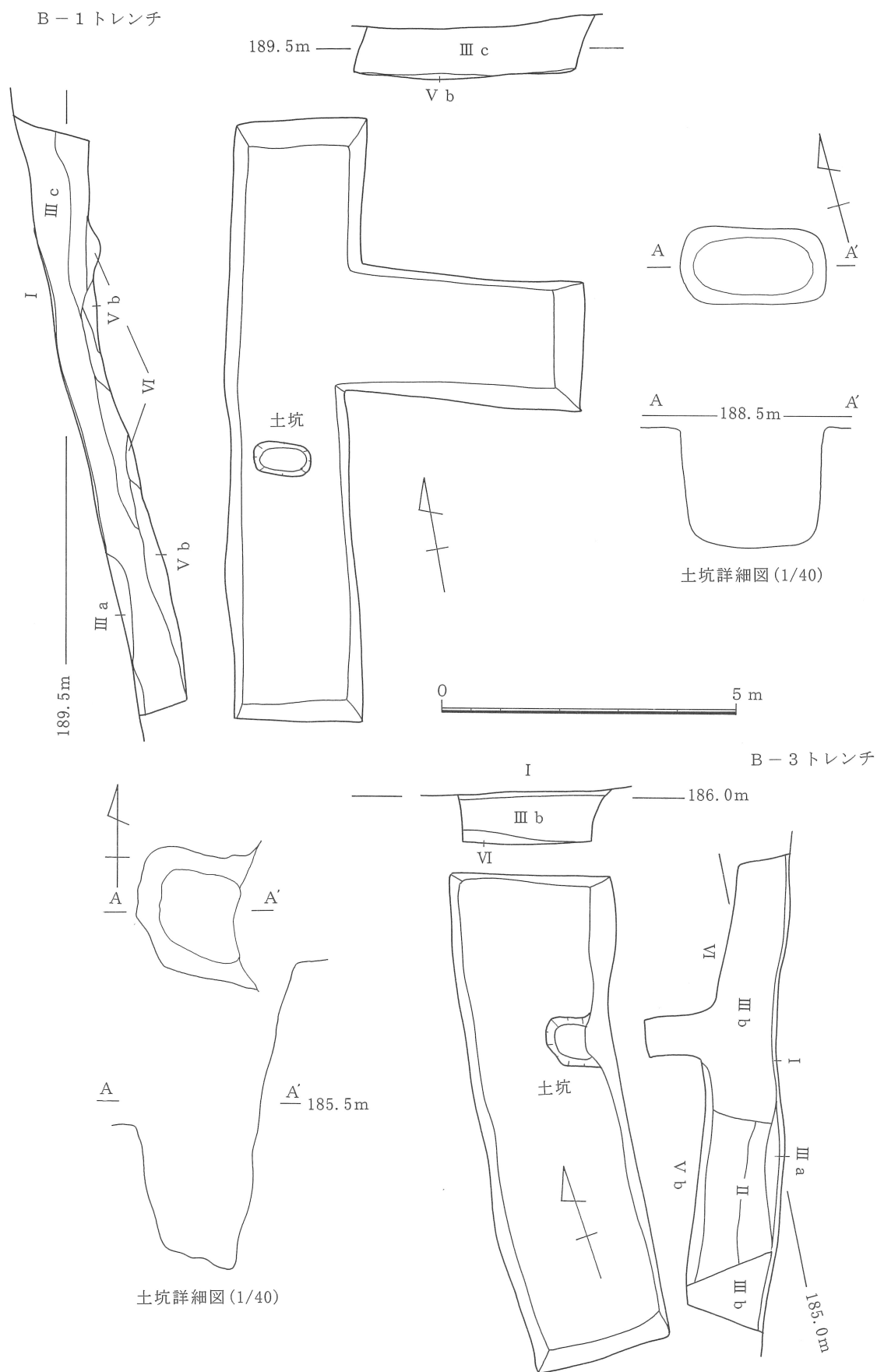
土坑 形状は隅丸方形を呈し、長径97cm、短径61cm、深さ90cmを測る。床面は水平であり、壁面は垂直に立ち上がる。縄文土器片2点が出土した。この土坑の性格は不明であるが、落とし穴の可能性があらう。

B-2トレンチ(第5図) 東西に長く設定したトレンチであるが、B-1トレンチで検出された作業道路が続いていたため地山は削平されており、その上層はすべて盛土(IIIc)である。東西部分では遺構・遺物は出土していない。北へ延ばしたトレンチでは、深さ30cmほどで地山が検出され、この面を掘り込むように土坑1基が検出された。

土坑 この土坑は長径ほぼ1mを測る平面楕円形で、深さは70cmほどである。床面は平らであり、壁面はほぼ垂直である。遺物は出土せず、その性格は不明である。あるいは落とし穴であらうか。

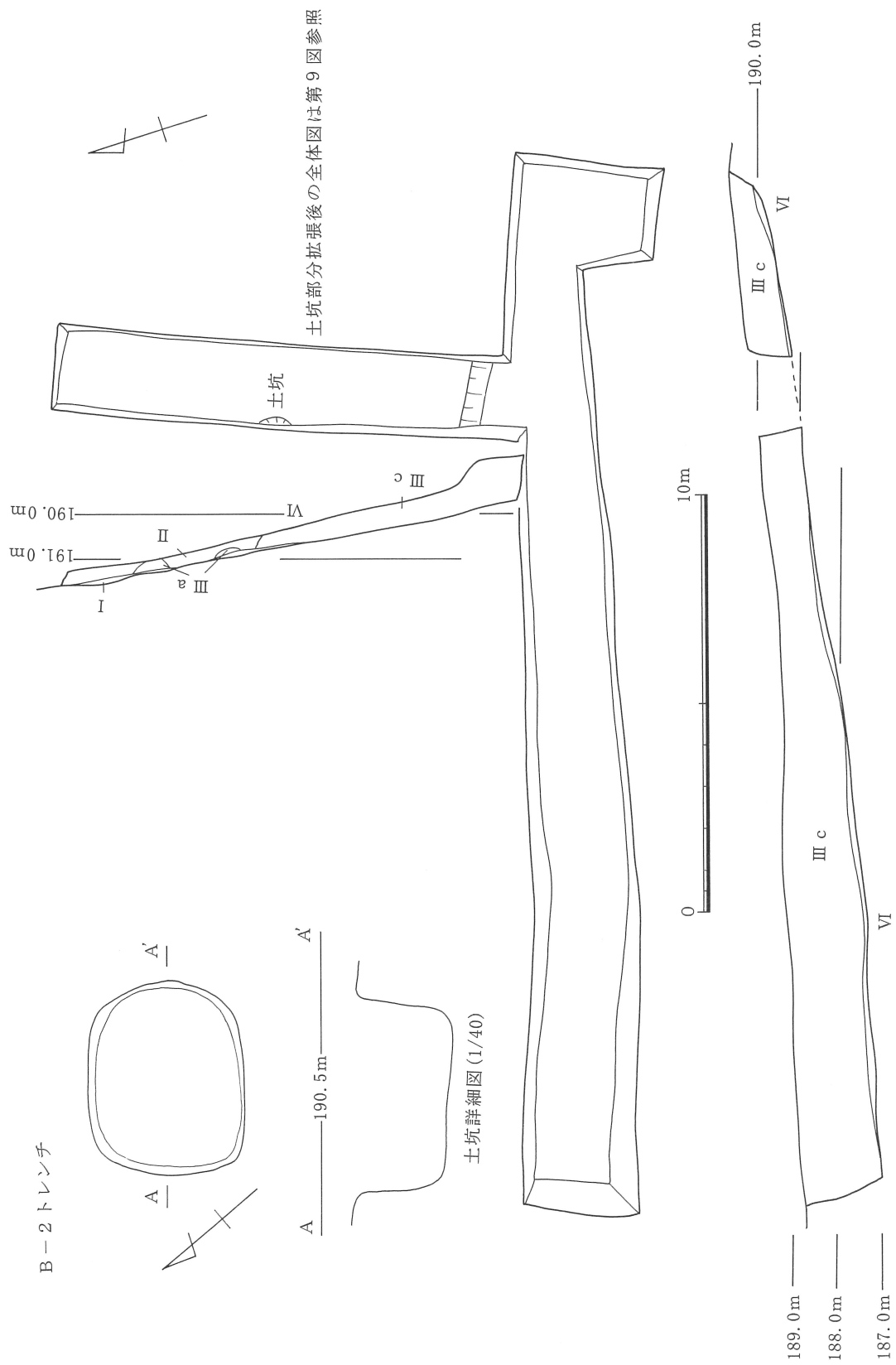
B-3トレンチ(第4図) 平均深さ1mで地山の黄色ローム(VI)を検出した。東壁にかかって土坑1基が検出された。

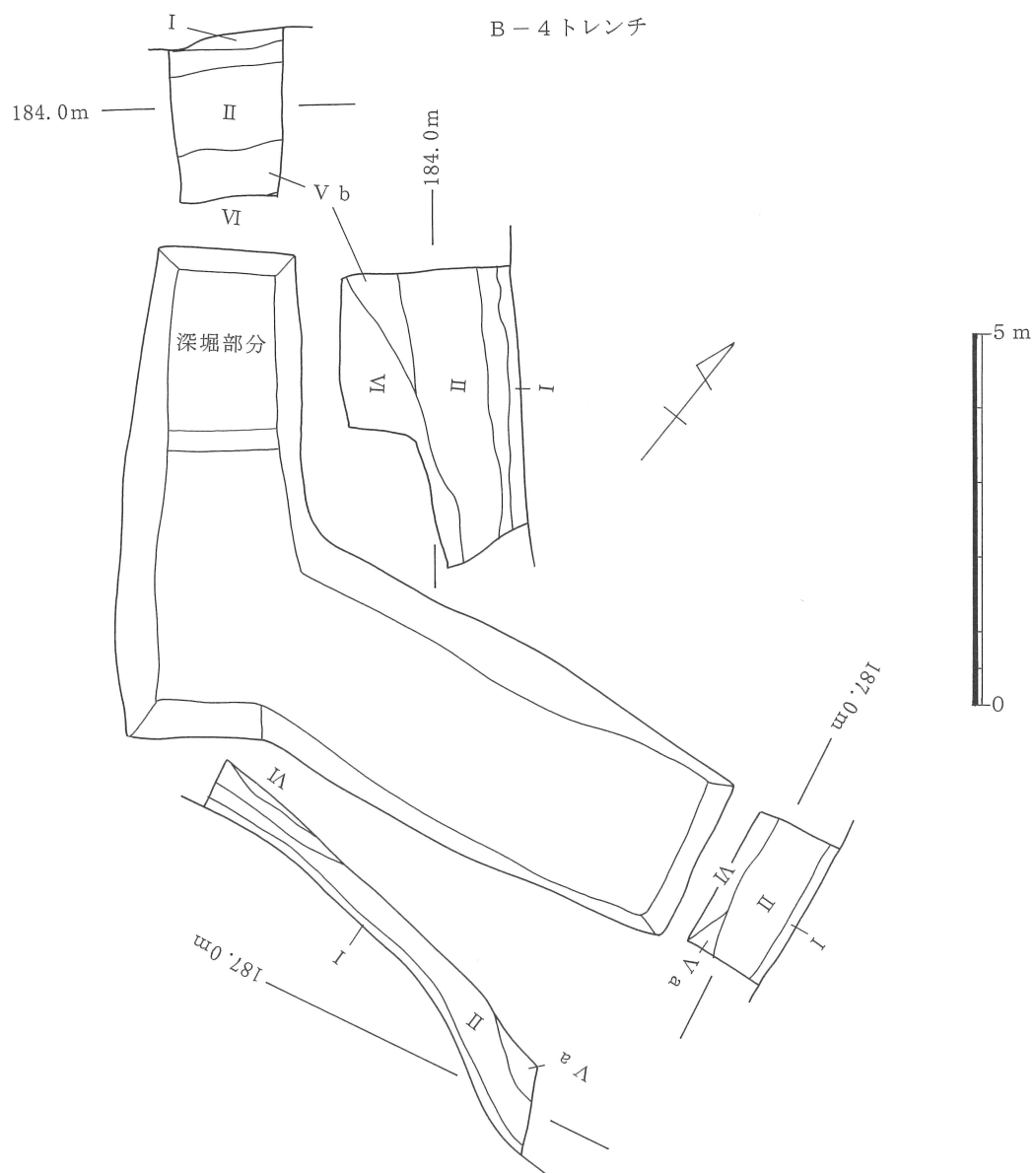
土坑 不整形な円形を呈し、直径約80cm、深さ1.2mを測る。床面、壁面とも凹凸が認められ、埋土は締まりのない土であった。出土遺物はなく、性格も不明である。あるいは落とし穴であ



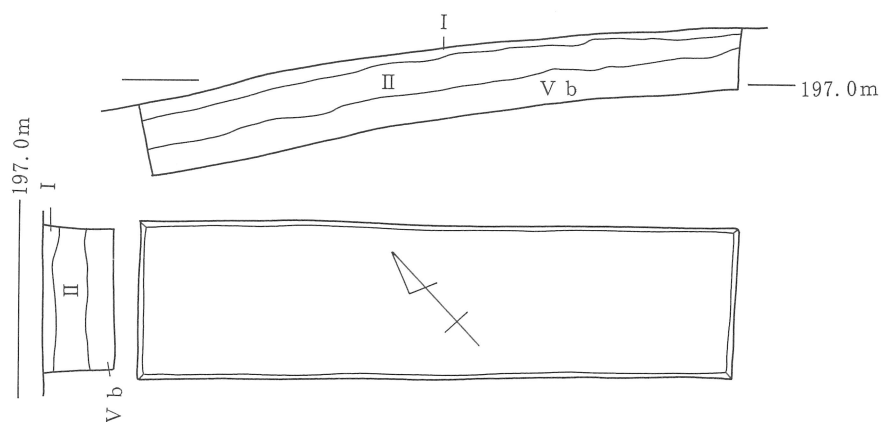
第4図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(2)B地区(1/100)

第5図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(3)B地区(1/150)



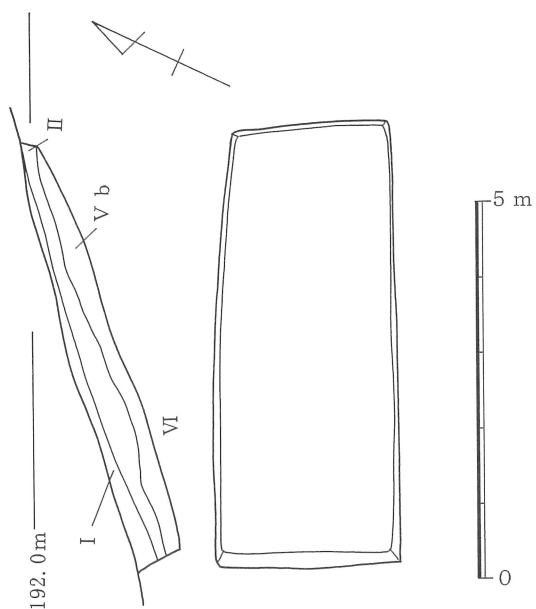


B-5 トレンチ

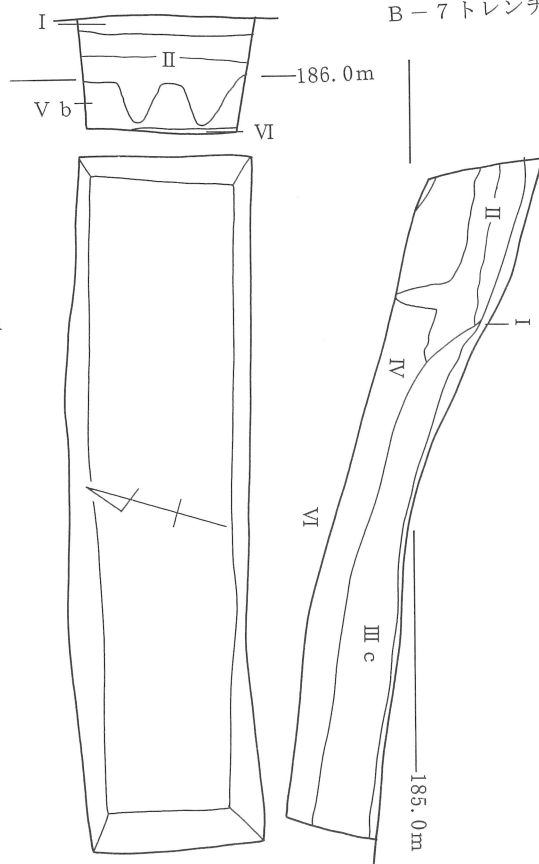


第6図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(4)B地区(1/100)

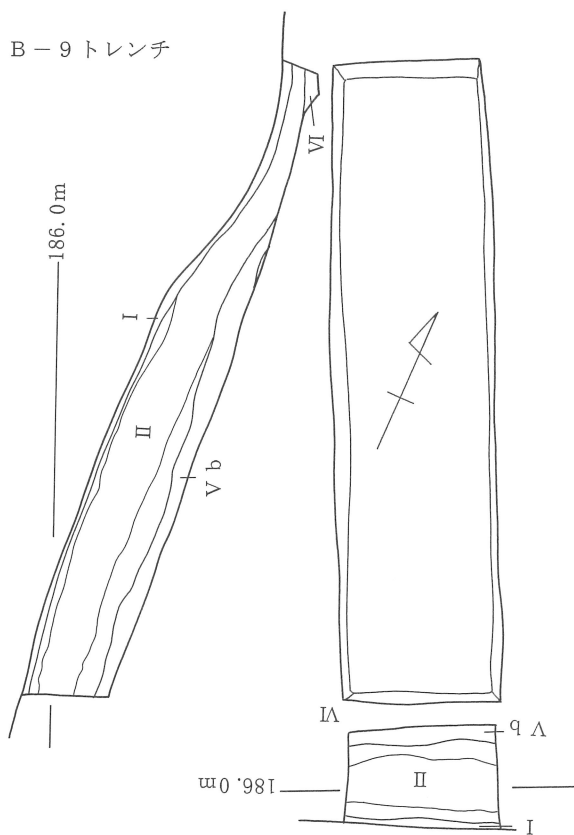
B-6 トレンチ



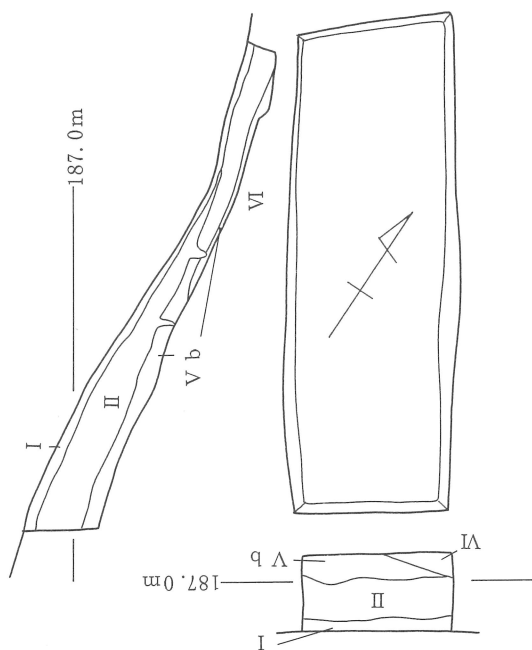
B-7 トレンチ



B-9 トレンチ



B-8 トレンチ



第7図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(5)B地区(1/100)

ろうか。

B-4 トレンチ(第6図) 「く」の字状に掘削したトレンチである。斜面の部分では平均深さ0.5mで地山のロームが検出された。トレンチの北端を一部深掘りし、この部分の地山が黄色ロームでなく、固結しかかった黄灰色粘質土であることを確認した。土層はすべて自然堆積を示し、遺構・遺物は出土しなかった。

B-5 トレンチ(第6図) 平均深さ0.8mで地山の黄色ロームを検出した。土層はすべて自然堆積を示し、遺構・遺物は出土しなかった。

B-6 トレンチ(第7図) トレンチを設定した地形が斜面であるため、深さ0.2mから0.7mで地山の黄色ロームを検出した。土層はすべて自然堆積を示し、遺構・遺物は出土しなかった。

B-7 トレンチ(第7図) トレンチを設定した地形が斜面であるため、平均深さ1.2mほどで地山のローム層を検出した。地山の上に直接自然堆積層(II)が観察され、遺構・遺物は出土しなかった。

B-8 トレンチ(第7図) 斜面に設定したトレンチのため、0.5mから1mの深さで地山のロームを検出した。土層はすべて自然堆積を示し、遺構・遺物は出土しなかった。

B-9 トレンチ(第7図) B-8 トレンチのすぐ西側に設定したトレンチであるため、堆積土(II)がやや厚く堆積しているが、基本的な土層の状況はB-8 トレンチと同様である。遺構・遺物は出土しなかった。

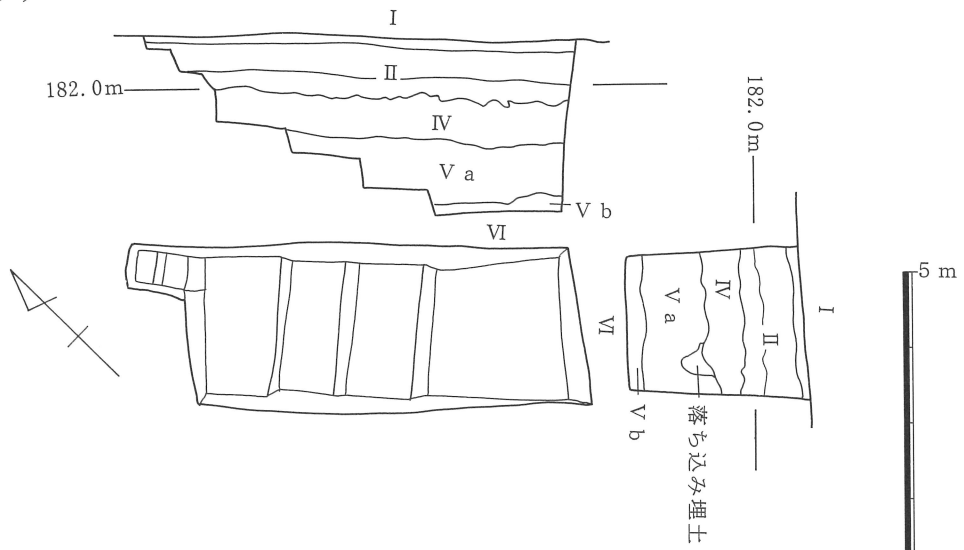
B-10 トレンチ(第8図) 深さ1.2mの高さから3段の階段状に掘削した。表土下2.3mで黄色ソフトローム層(Vb)を検出したところで安全を確保するために掘削を終了した。このトレンチでは表土下0.8mほどで富士黒色土層(IV)が検出され、この上面を中心に弥生土器が出土した。その上に堆積している黒色土(II)より土師器、須恵器片も若干出土している。表土下1.5mからソフトロームの間では遺物は出土していない。遺構については断面の観察から、富士黒色土面を掘り込むようにピット状の遺構が認められるが、性格は不明である。その他の面では遺構は検出されていない。

B-11 トレンチ(第8図) 逆「L」字状に設定したトレンチである。南側拡張部分において焼土坑が検出された。この遺構以外は、何も検出されていない。

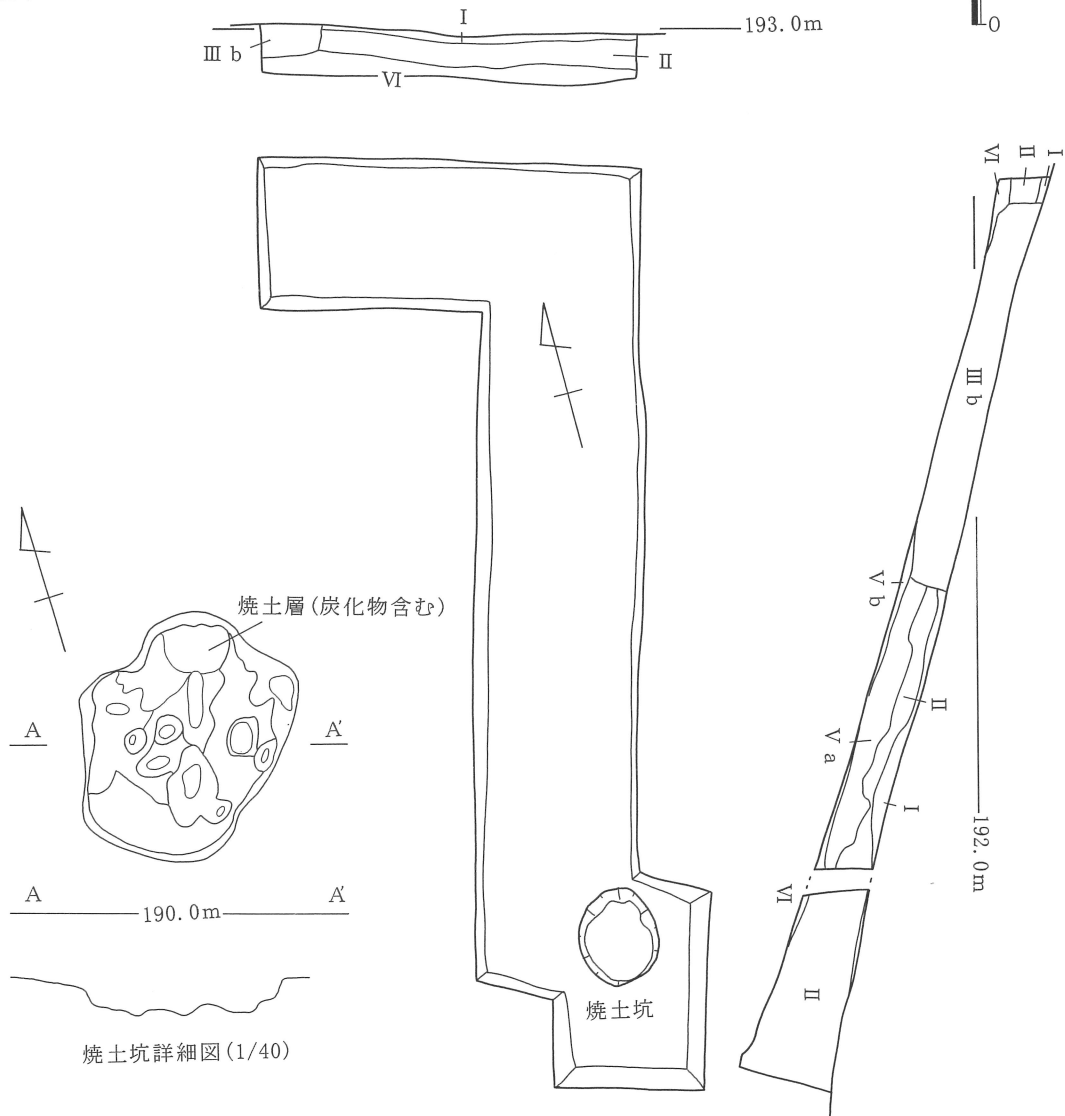
焼土坑 平面はほぼ正円形。床面はかなりの凹凸が見られ、凹部分は土が焼けていたが、焼け具合は弱い。遺物は出土していない。掘り込まれている土層から判断すると、縄文時代の遺構の可能性はある。

B-12 トレンチ(第9図) 当初設定したトレンチの中央付近で住居址らしい落ち込みが検出されたため、北、南、東側にそれぞれ拡張した。その結果東側ではB-2 トレンチの北側に延ばした部分とつながることとなった。この落ち込み部分を精査した結果、焼土、柱穴と思われるような遺構は検出されず、この部分を完掘したところ不整形な円形を呈した。このような不整な土層の乱れは風倒木によって生じたものと考えることがもっとも妥当であろうという結論を得た。この攪乱された土層から縄文前期に属すると思われる土器片が数点出土した。このほかに土坑1基が検出された。

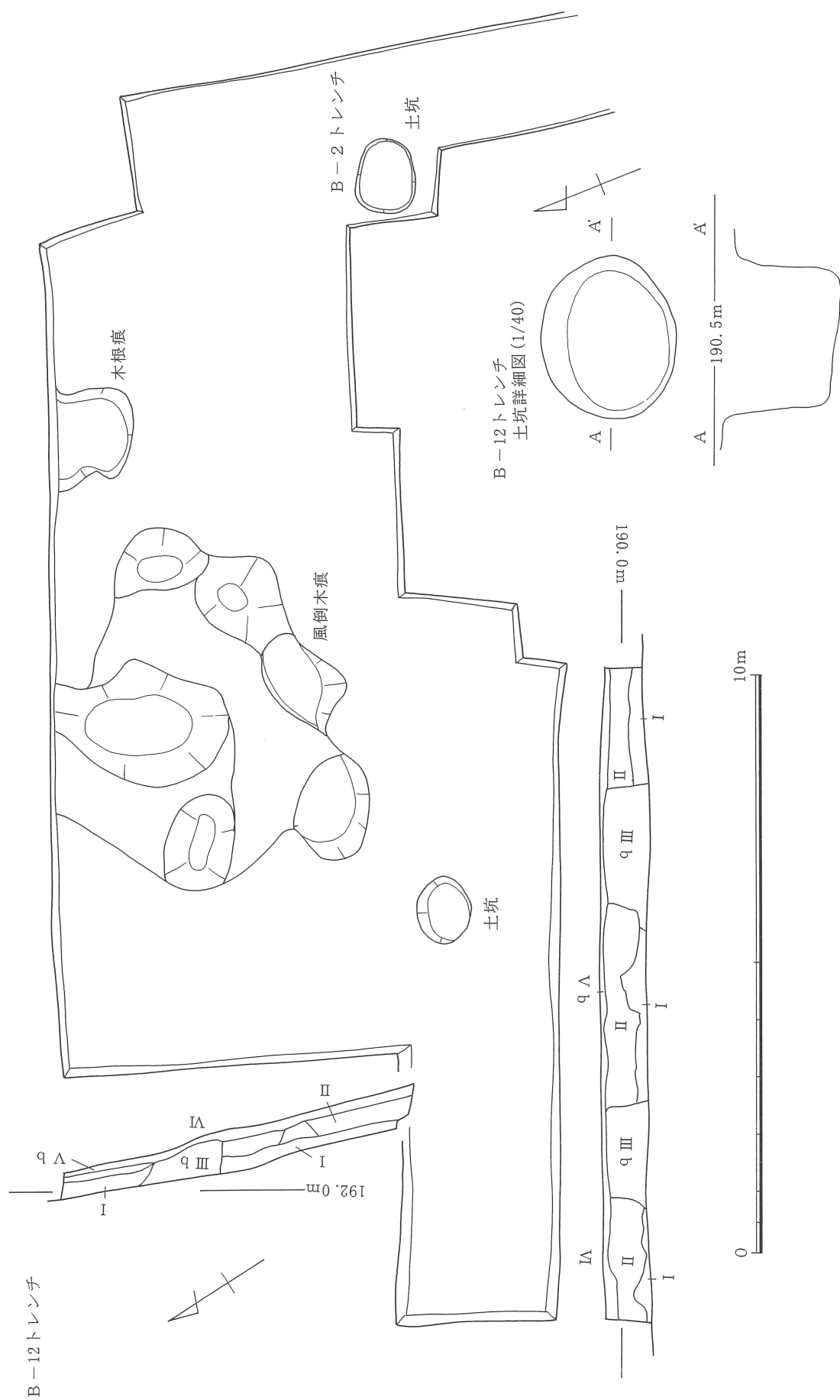
B-10トレンチ



B-11トレンチ

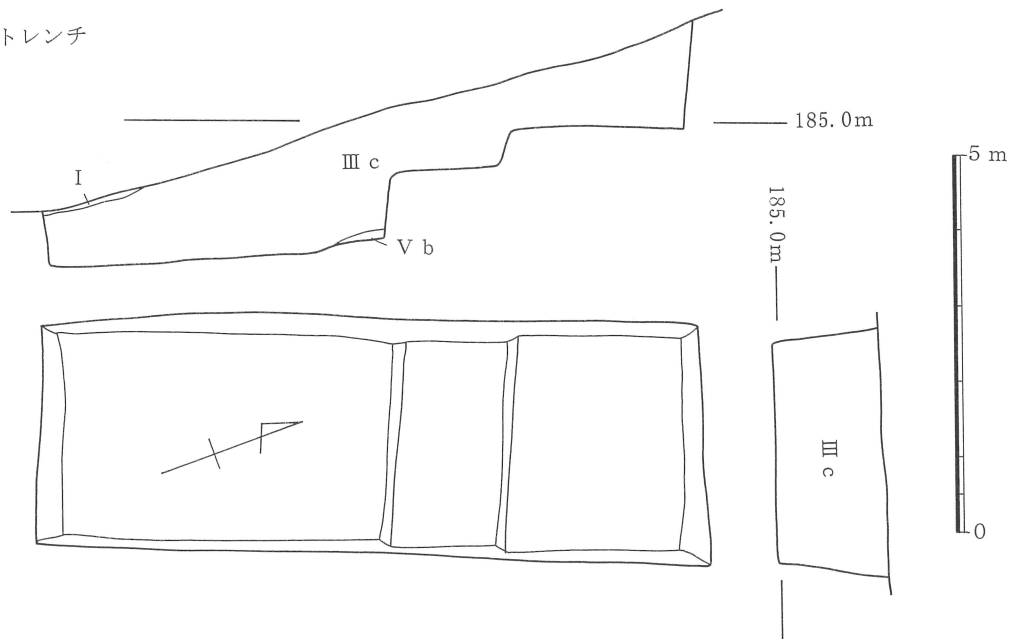


第8図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(6)B地区(1/100)

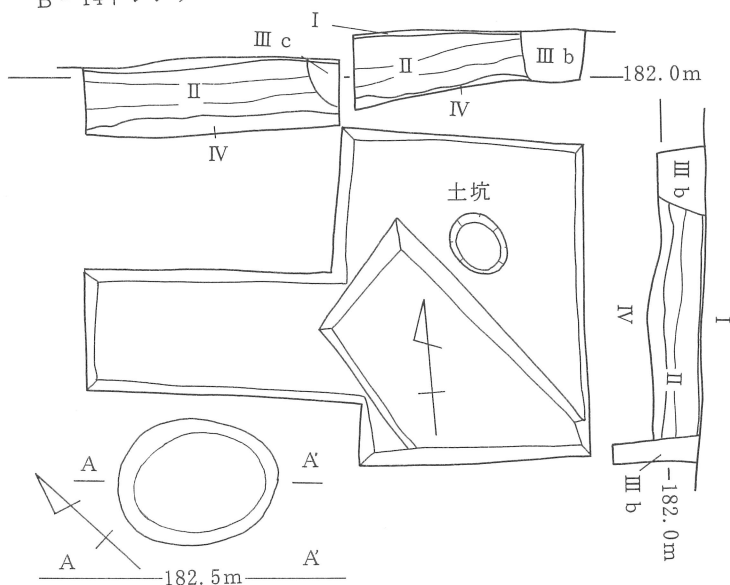


第9図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(7)B地区(1/100)

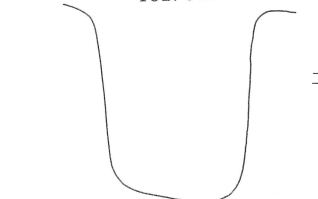
B-13トレンチ



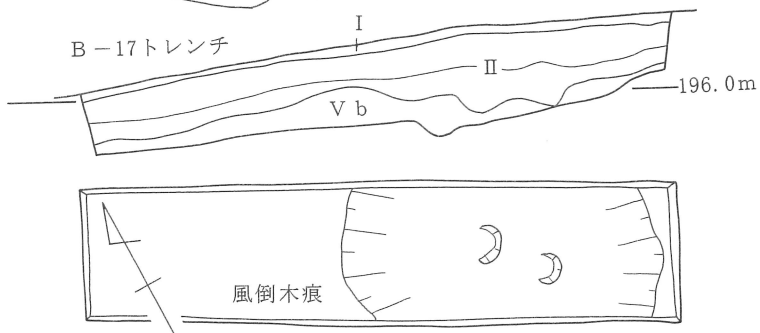
B-14トレンチ



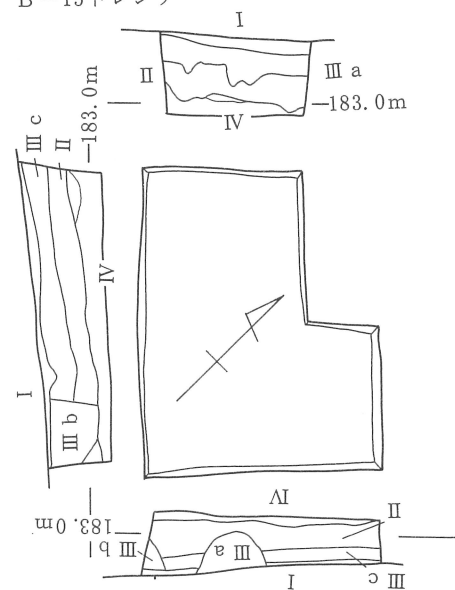
土坑詳細図 (1/40)



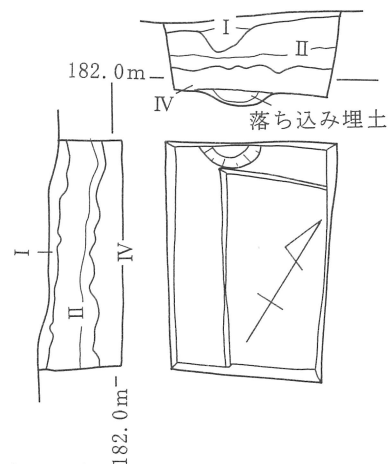
B-17トレンチ



B-15トレンチ



B-18トレンチ



第10図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(8)B地区(1/100)

土坑 直径1.1mほどを測る楕円形であり、深さは80cmほどを測る。床面はほぼ平らであり、壁面は垂直に立ち上がる。遺物は何も出土せず、この土坑の性格は不明である。あるいは落とし穴であろうか。

B-13トレンチ(第10図) 斜面に設定したため、結果的に3段の階段状に掘削した。この部分の土層はすべて昭和天皇陵造営以後の盛土(IIIc)であり、遺構は検出されなかった。出土遺物としては磁器片1点のみが出土している。

B-14トレンチ(第10図) B-10トレンチで確認された富士黒色土層(IV)の拡がりを確認するために設けたトレンチである。その結果B-10トレンチと同様表土下0.8mほどで富士黒色土面が検出された。この面を中心に弥生土器片が出土している。この時期の遺構は検出されなかった。その他の時期に属すると考えられる遺構については、土坑1基が検出された。

土坑 平面形が楕円形を呈し、長径95cm、短径62cm、深さ90cmを測る。床面は水平であり、壁面は垂直に立ち上がる。この土坑に伴う遺物が何もないため、掘り込まれた土層から判断せざるを得ないが、弥生時代以降と判断でき、B-16トレンチで検出された住居址(後述)と同じ時期(平安時代)に属する遺構の可能性はある。

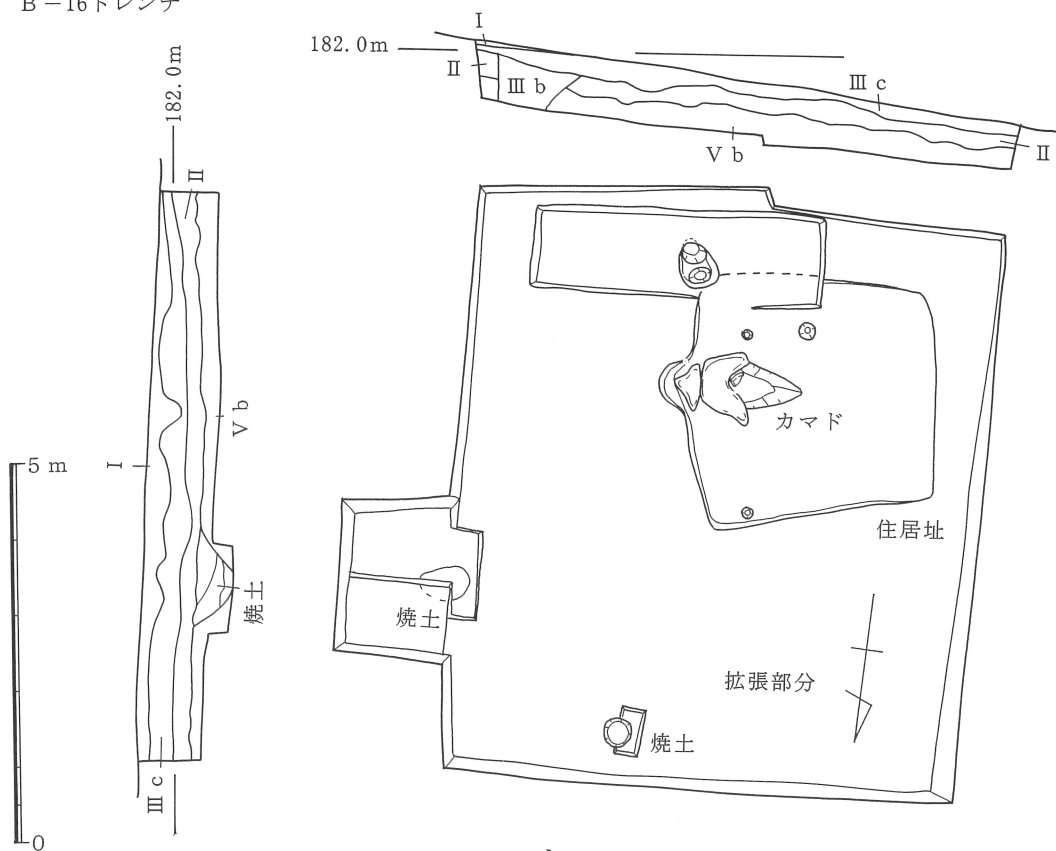
B-15トレンチ(第10図) B-14トレンチと同様、富士黒色土層(IV)及び弥生時代の遺物の拡がりを確認するために設定したトレンチである。平均深さ1.0mで富士黒色土面を確認し、弥生時代に属する遺物が出土した。しかしながら遺物の量としてはB-14トレンチよりも少なく、弥生時代の遺物は東に行くにつれて密度が薄くなるようである。遺構は検出されなかった。

B-16トレンチ(第11図) 表土下0.8mほどで焼土層及び固く締まった面を検出し、不整形な掘り込み(ピット)が検出された。また、北側土層断面において黄灰色の粘土の立ち上りが検出されたため北側に拡張してその性格の追究を行った。その結果、北側拡張区の端で黄色粘土によって造られた竈の一部が検出され、土層で確認された立ち上りが住居址の壁であることが判明した。また、焼土を含む層はこの住居址の覆土であると判断できた。この覆土から出土する土器は、土師器及び須恵器であり、この土器の検討から平安時代の住居址であると考えられた。この遺構の性格を明らかにするためにトレンチを拡張し、住居址が完掘できるように一辺7mのほぼ正方形の掘削区を設けて追加調査にあたった。

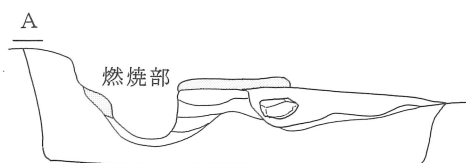
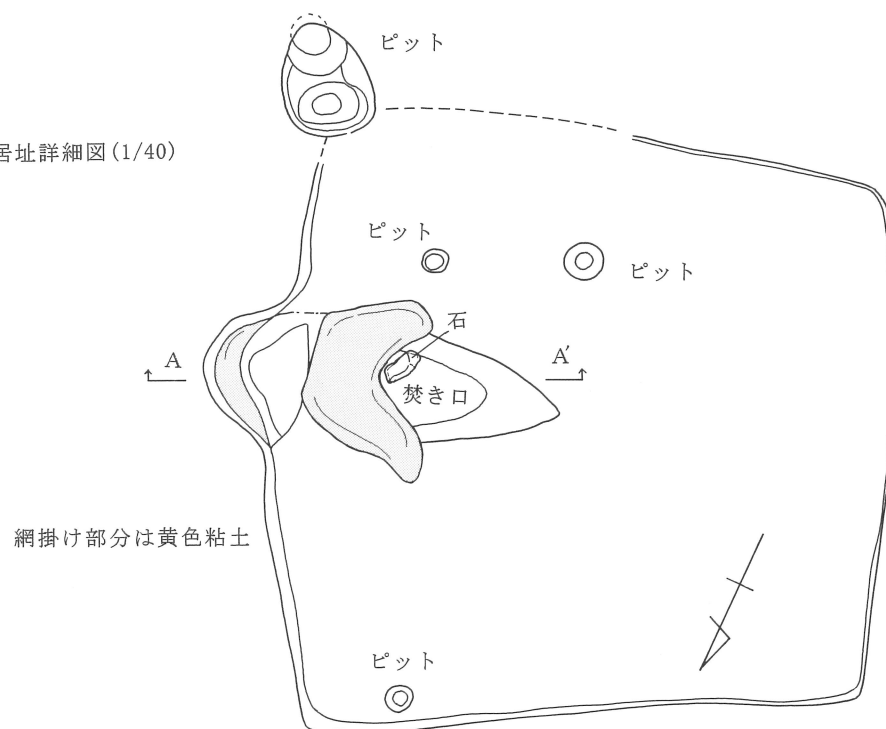
調査区内では後述する住居址以外に明確な遺構はなく、焼土が集中する部分が2箇所認められた。そのうち住居址近くに検出された焼土は直径30cmほどの範囲に広がり、半截して断面の観察を行ったが土坑などの遺構は伴っていなかった。また、東壁の断面で観察された焼土部分は、東側に2m×1.5mの範囲を拡張して性格を追究した。この結果も先の焼土部分と同じく遺構に伴うものではなかった。よって、これらの焼土の性格については不明と言わざるを得ない。しかし検出された面が住居址の掘込みがなされている面と同じ高さであることから、この住居址と同じ時期の焼土であることは間違いなく、竈の焼土を廃棄した可能性も考えられる。

住居址(図版7-1) 一辺約3mを測り、東辺の中央に竈が構築されていた。住居址に伴うピットは3箇所検出された。これらのピットが柱穴である可能性は高いものの、3本のみというのは住居址の柱穴としては不自然である。おそらく住居址の西側はかなり削平されていたため

B-16トレンチ



住居址詳細図(1/40)



第11図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(9)B地区(1/100)

に検出されなかったと考えられる。竈は住居址の大きさに比べかなり大きく、住居址の半分ほどのところまで焼土が認められた。この竈をたち割って調査した結果、燃烧部分にはかなりの焼土が堆積していたものの、住居址外に延びる煙道は検出されなかった。(図版7-2)

この住居址の床面からは覆土に包含されていたものと同様の土師器、須恵器片が出土している。住居址の出土遺物としては少ないと思われるが、先に述べたように住居址の遺構がすでによりかなり削平を受けているためと思われる。土器以外の遺物は出土しなかった。

B-17トレンチ(第10図) B-5・6トレンチのほぼ中間に設定したトレンチであり、トレンチの北半分ほどで土層の乱れがあり、この性格を追究した。その結果、B-12トレンチで検出された風倒木による攪乱と同様のものであると考えることがもっとも妥当であると判断した。この攪乱された土層から若干の縄文土器が出土した。遺構は検出されなかった。

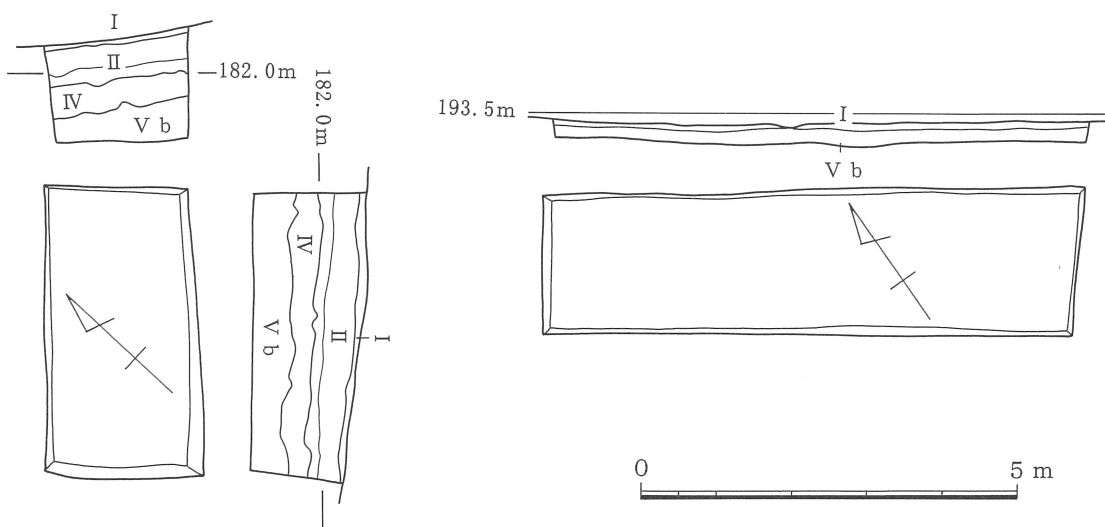
B-18トレンチ(第10図) 弥生時代の遺物の拡がり把握するために、B-10・15トレンチのほぼ中間に設定した。西壁付近において焼土が検出されたため、この部分を中心に掘削したが、遺構は検出されなかった。遺物はB-16トレンチで出土したものと同じく、平安時代に属すると考えられる須恵器、土師器が若干出土したものの、弥生時代の遺物はほとんど見られなかった。よって弥生時代の遺物の拡がり把握はB-10・14トレンチを中心とするものと考えられる。

B-19トレンチ(第12図) 弥生時代の遺物の南側への拡がり確認するために設定したトレンチである。表土下80cmほどで富士黒色土面(IV)を検出し、この面で遺構の有無を確認するための精査を行った。結果的に遺構は確認されず、遺物の出土もわずかである。弥生時代の遺物の拡がり把握は、この部分までは及んでいないようである。

B-20トレンチ(第12図) B-11トレンチの北側に設定し、遺構、遺物の拡がり確認した。掘削の結果、表土下40cmほどで黄色ローム層(VI)が検出され、この面で精査したところ遺構はなく、また遺物もなにも出土しなかった。この部分は現在の地形が示すように尾根の上端部分にあたり、遺物を包含するような土層は流出しているものと思われる。(徳田 誠志)

B-19トレンチ

B-20トレンチ



第12図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(10) B地区(1/100)

(4) C地区の概要

C地区は、多摩陵・多摩東陵の北東部に位置する小さな谷地形の場所である。その奥をはじめ緩斜面地があって、遺構の存在が予想されたので、当該箇所計4本のトレンチを設定した。

C-1・2トレンチは第I次調査で、C-3・4トレンチは第II次調査で発掘したものである。

C-1トレンチ(第13図) 谷の奥の緩斜面地に設定した。地表下約3mまで掘下げたが、ローム面には至らず、茶褐色土・黄褐色土・暗褐色土など7層が確認された。これらの土層は、谷の奥を埋立て緩斜面地を造成した盛土(IIIc)と考えられる。遺構は検出されなかった。下層の暗褐色土中からコンニャク印判の施された磁器が出土した。

C-2トレンチ(第14図) 南東に谷を望む斜面の中腹にある緩斜面地に設定した。ほぼ自然地形に沿って自然堆積した黒褐色土(IIa)やその下の漸移層(Va)は、大きく掘削され、その上に盛土(IIIc)がされている。各所に落ち込みらしい土相の染込が認められ、発掘したが、形をなさないもので、樹根の痕跡と思われ、遺構と認められるものは検出されなかった。遺物は出土しなかった。

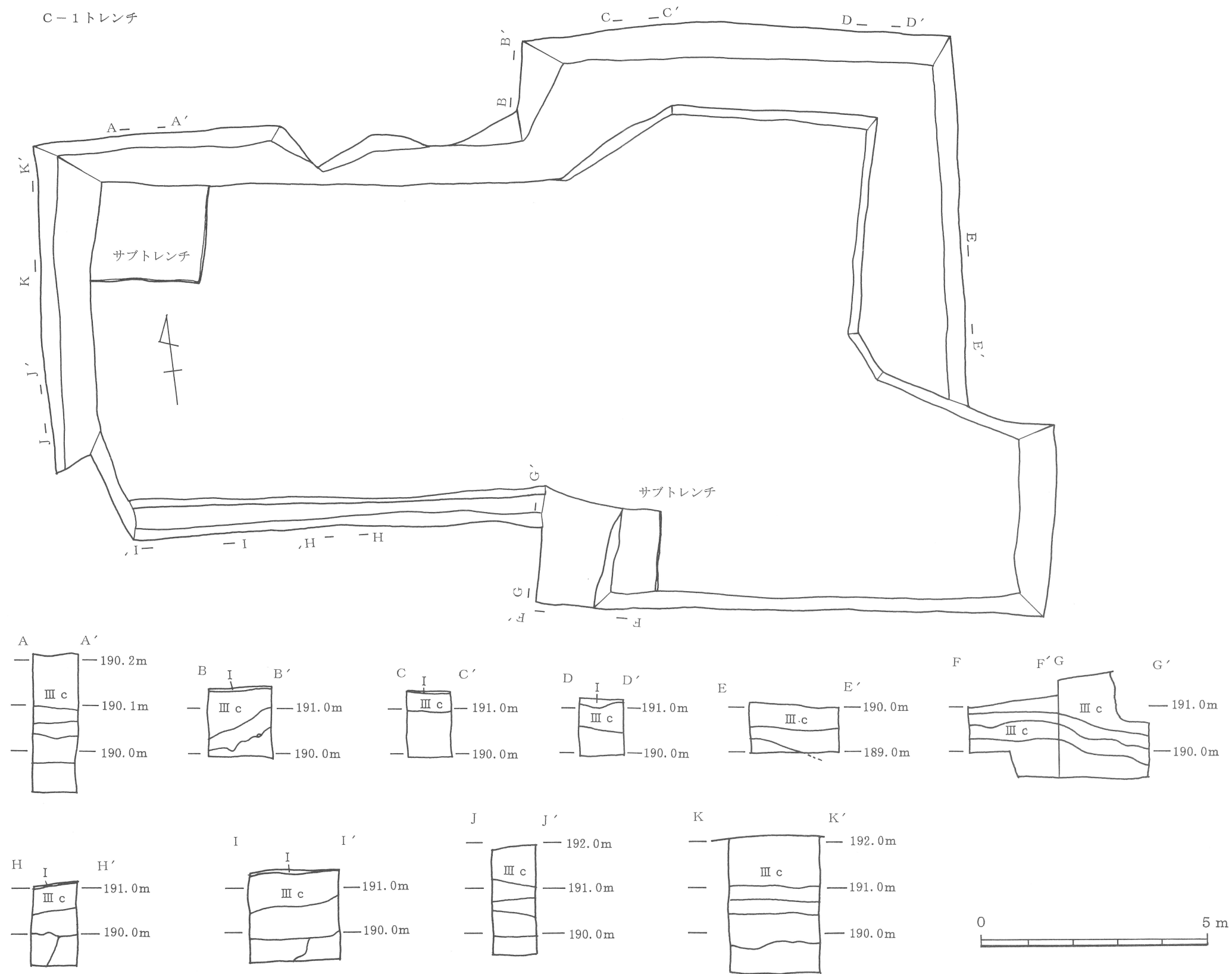
C-3トレンチ(第15図) 谷奥の緩斜面の続きで、南西に谷を望む斜面の中腹にある平坦に近い場所に設定した。ローム層(Vb)に及ぶ大きな掘削を受け、自然堆積層である黒褐色土(IIa)と漸移層(Va)は既に失われていた。ローム層の上は暗褐色土・暗黄色土・黒色土の盛土(IIIc)をし、その上面を均している。ローム面で土坑群が2箇所検出された。盛土中から縄文土器が1片(第18図21)出土した。

1号土坑群 平面楕円形又は楕円形の浅く小さな土坑3基(うち1基は、平面瓢箪形で、2基の疑いが残る)からなる。各土坑は、互いに接続あるいは重複するように配され、本来はそれぞれ独立した遺構の可能性がある。各土坑は、長径約0.3~0.6m、短径約0.4m、深さ約0.2~0.5mで、壁はほぼ直に落ち、床面は平らである。平面楕円形で浅い1基には床面に長径10cm大の河原石3個を列べ、別の平面瓢箪形1基には覆土最上部に長径20cm大の河原石1個を据える。遺物はなく、遺構の性格は不明。

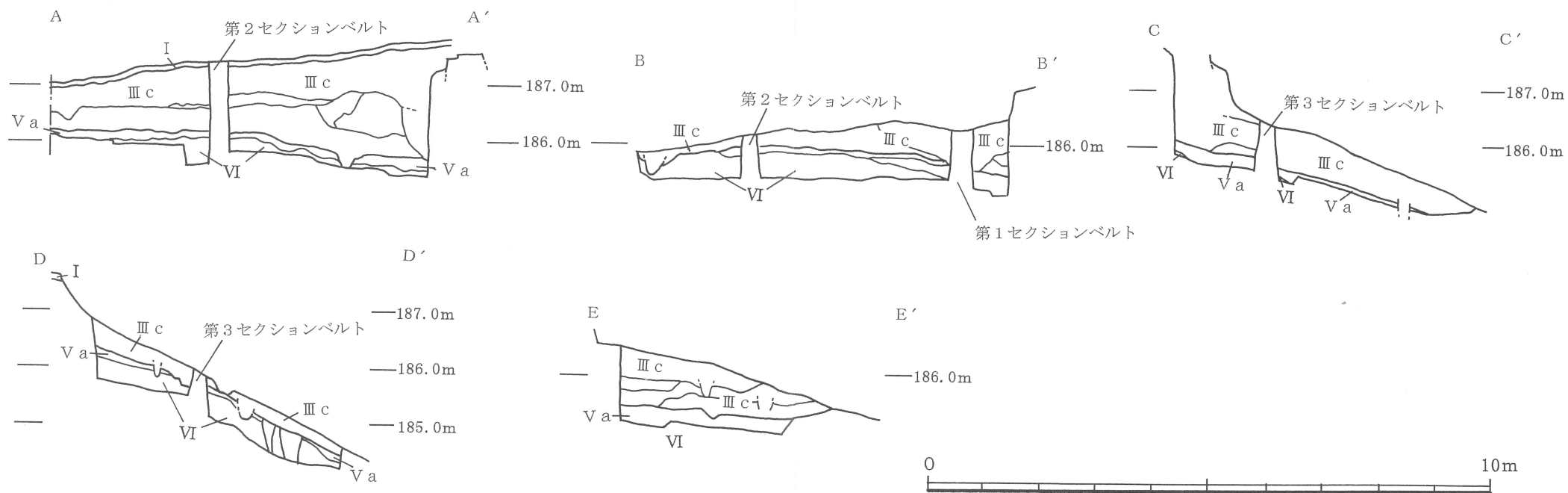
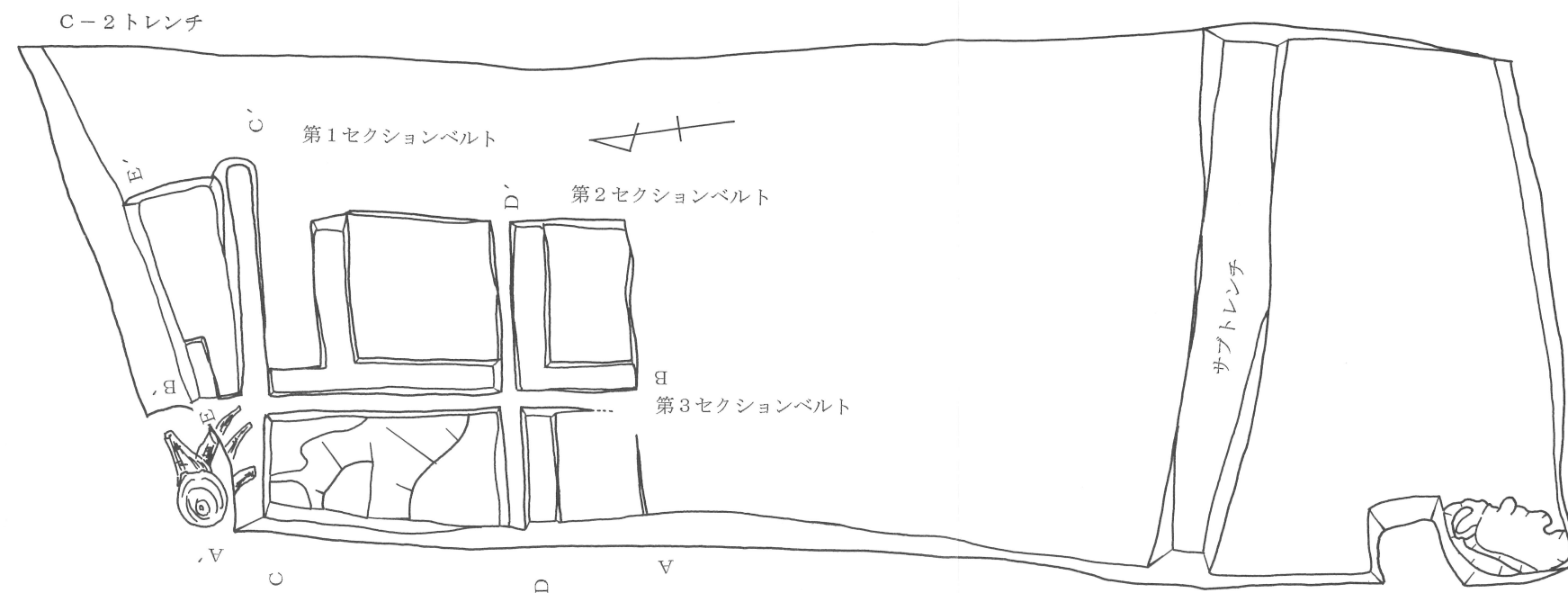
2号土坑群 平面楕円形の浅く小さな土坑3基からなる。各土坑は、互いに接続あるいは重複するように配され、本来はそれぞれ独立した遺構の可能性がある。各土坑は、長径約0.4~0.6m、短径約0.4m、深さ約0.2~0.4mで、壁はほぼ直に落ち、床面は平らである。浅い1基には床面に割れた平石を重ね、その上に長径15~30cm大の河原石1個を載せ、別の深い1基には床面に長径20cm前後の河原石4個を並べる。遺物は出土せず、遺構の性格は不明。以上、1号土坑群と類似する点が多い。

C-4トレンチ(第15図) C-3トレンチの南約14mの同トレンチと同じ地形の場所に設定した。一部に漸移層(Va)を残してローム層(Vb)に及ぶ大きな掘削を受け、その上に盛土(IIa)がされていた。掘削は、トレンチを斜行するテラスを残して自然地形に沿ってなされている。このテラス上に2条の溝状遺構と土坑1基が検出された。各所に落ち込みらしい土相の染込が認められ、発掘したが、形をなさないもので、樹根の痕跡と思われた。盛土中から陶器が1片出土した。

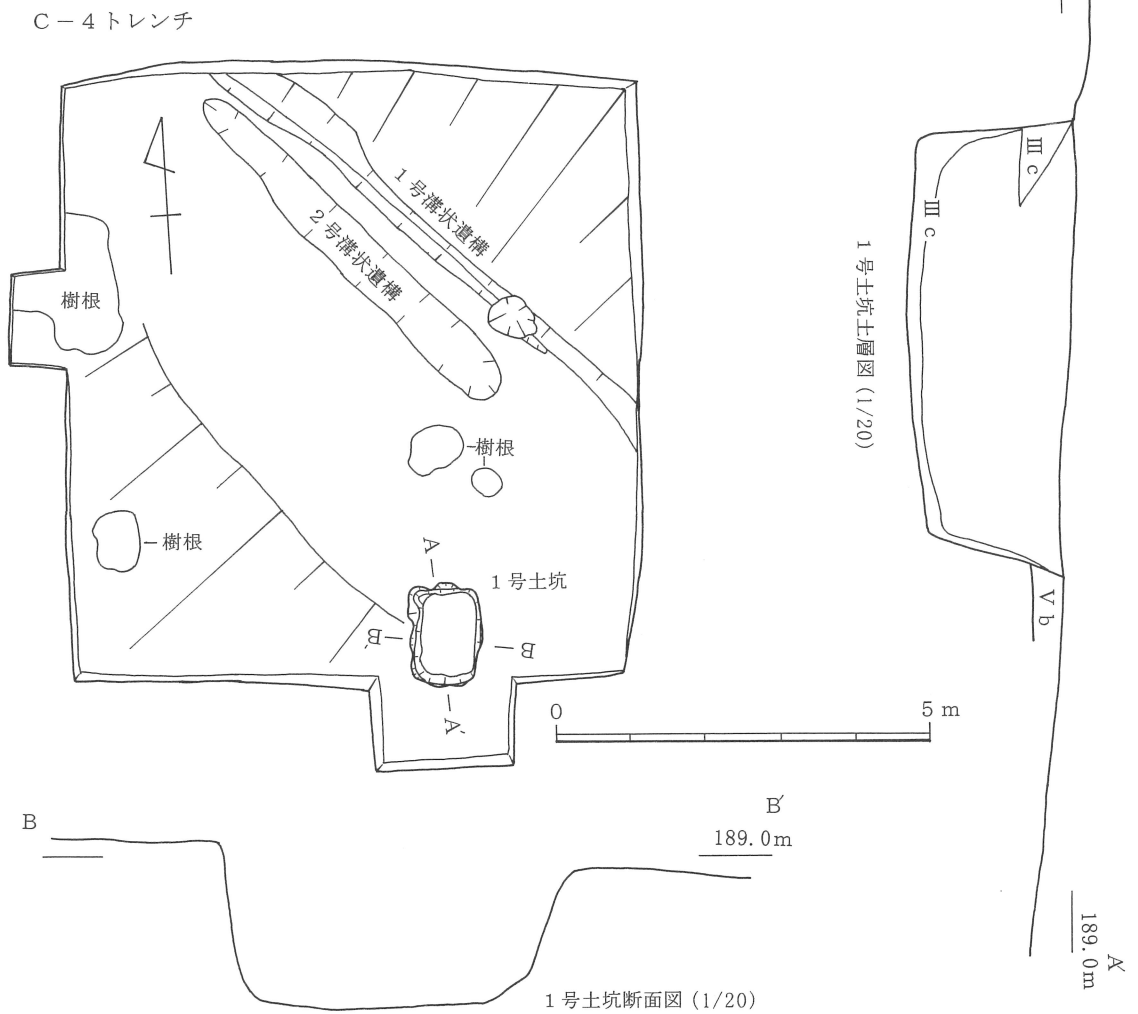
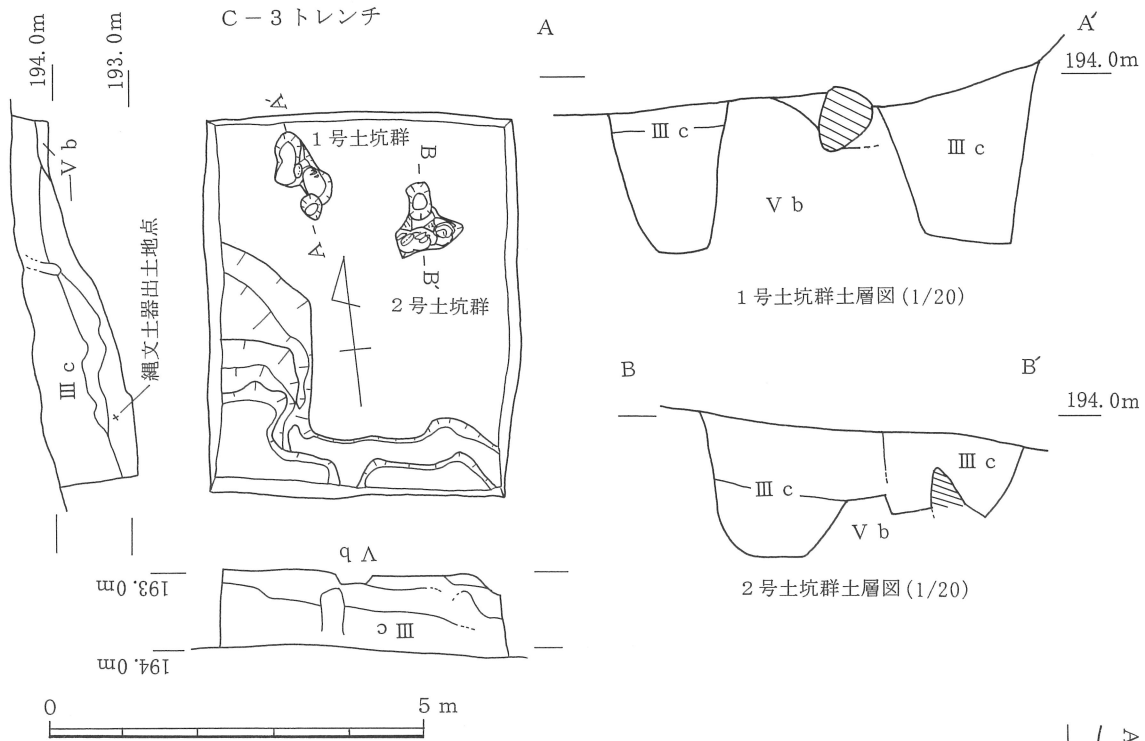
1号・2号溝状遺構 とともにテラスに並行して直線的に走り、幅は0.3~0.6mと狭く、床面



第13図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(11) C 地区 (1/100)

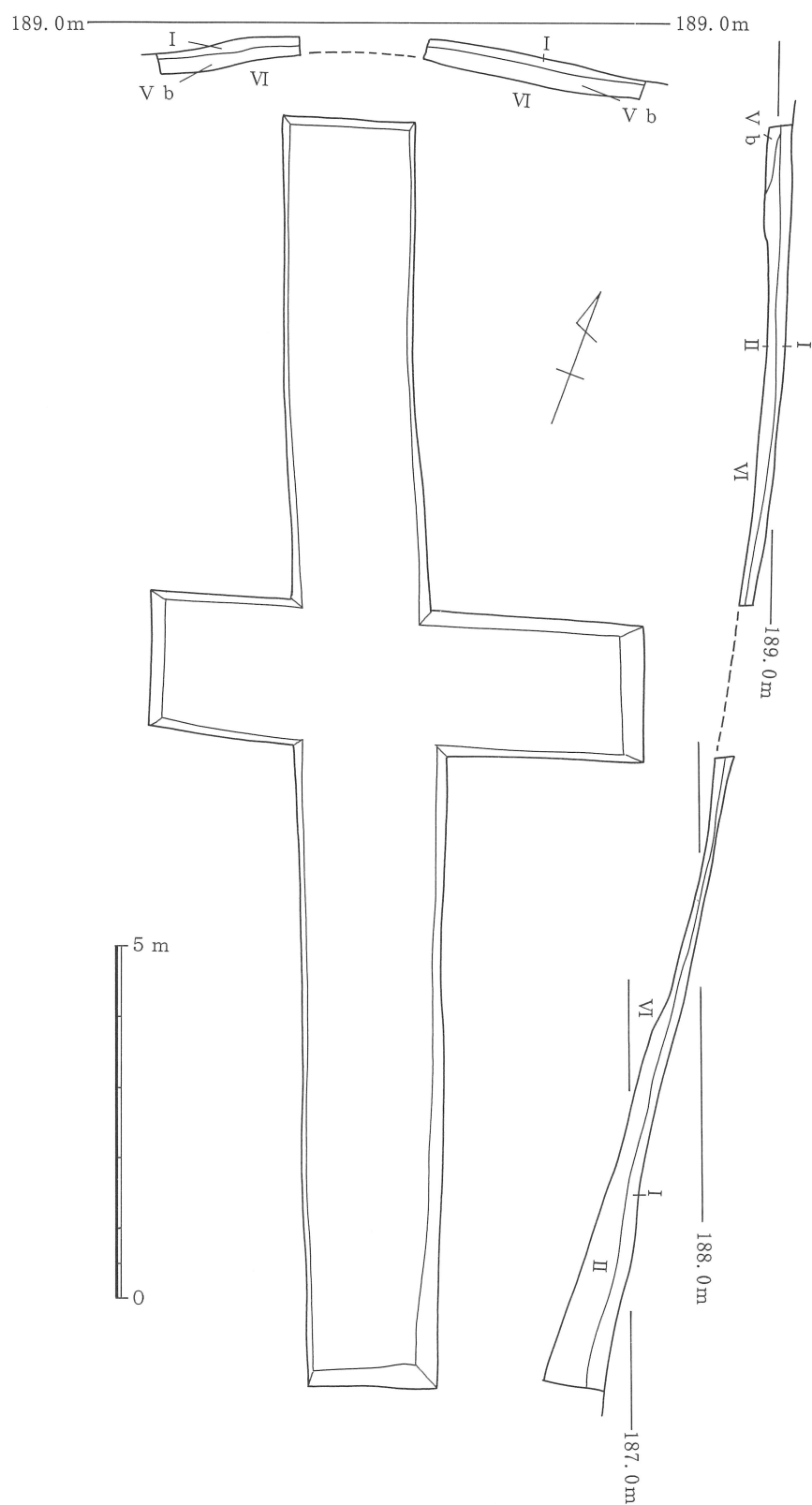


第14図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(12) C地区 (1/100)



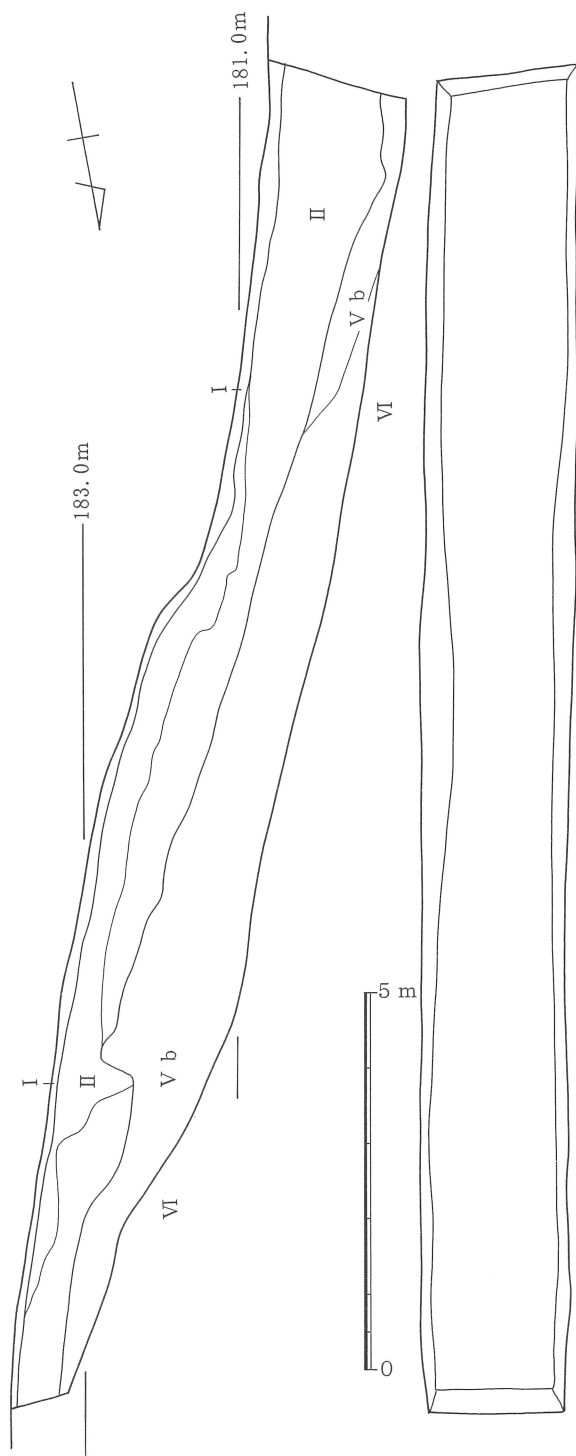
第15図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(13) C地区(1/100)

D-1 トレンチ



第16図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(13) D地区(1/100)

D-2 トレンチ



第17図 武蔵陵墓地トレンチ平面図および断面図(14) D地区(1/100)

は船底形で、深さも最深部で約5cmと浅い。

1号は未掘部に続くが、2号は長さ約5.5mで、両端は丸く終わる。この2条の溝に挟まれた幅約1.1mの細長い区画は、周囲よりわずかながら窪み、これが、全体として1つの遺構である可能性がある。この区画内からは遺物は出土せず、遺構の性格も不明。

1号土坑 平面隅丸方形、断面箱形の土坑で、開口部が一部崩れているようであるが、長径1.37m、短径0.95m、深さ0.45mを測る。壁面は、樹根によるかと思われる凹凸が著しいが、ほぼ直に落ち、床面は平らである。覆土は、ロームの細粒のほかに周囲の盛土と同質で柔らかい土が厚く堆積し、盛土を古く遡るものではないようである。遺物は出土せず、遺構の性格は不明。(佐藤 利秀)

(5) D地区の概要

D地区は大正天皇多摩陵からさらに西に入った地点であり、南にのびる尾根の上にトレンチを設定した。その理由としては、調査にあたって事前に陵墓地内を踏査した時点で、D-2トレンチを設定したところに段差が認められ、何らかの遺構の存在が予想されたことによる。

結果的にはこの地区からは遺構・遺物は全く出土せず、先の段差も自然地形であることが判明した。以下、各トレンチの概要を記述する。

D-1トレンチ(第16図) 尾根にそって南北18m、東西7mのトレンチを十字に掘削した。掘削の結果、トレンチの北端では表土下0.2mで地山と思われる土層(VI)が検出され、南側でも同じく0.9m下で地山を検出した。この面で遺構は何

も検出されていない。また、遺物もいっさい出土していない。

D-2 トレンチ(第17図) D-1の南側に設定した。先述したように、現地形において段差が認められたため、この段差が何らかの遺構ではないかと予想し、掘削を行った。結果的にはこの段差は自然の流土によって生じたものであり、遺構・遺物はいっさい出土しなかった。

3 出土遺物の概要

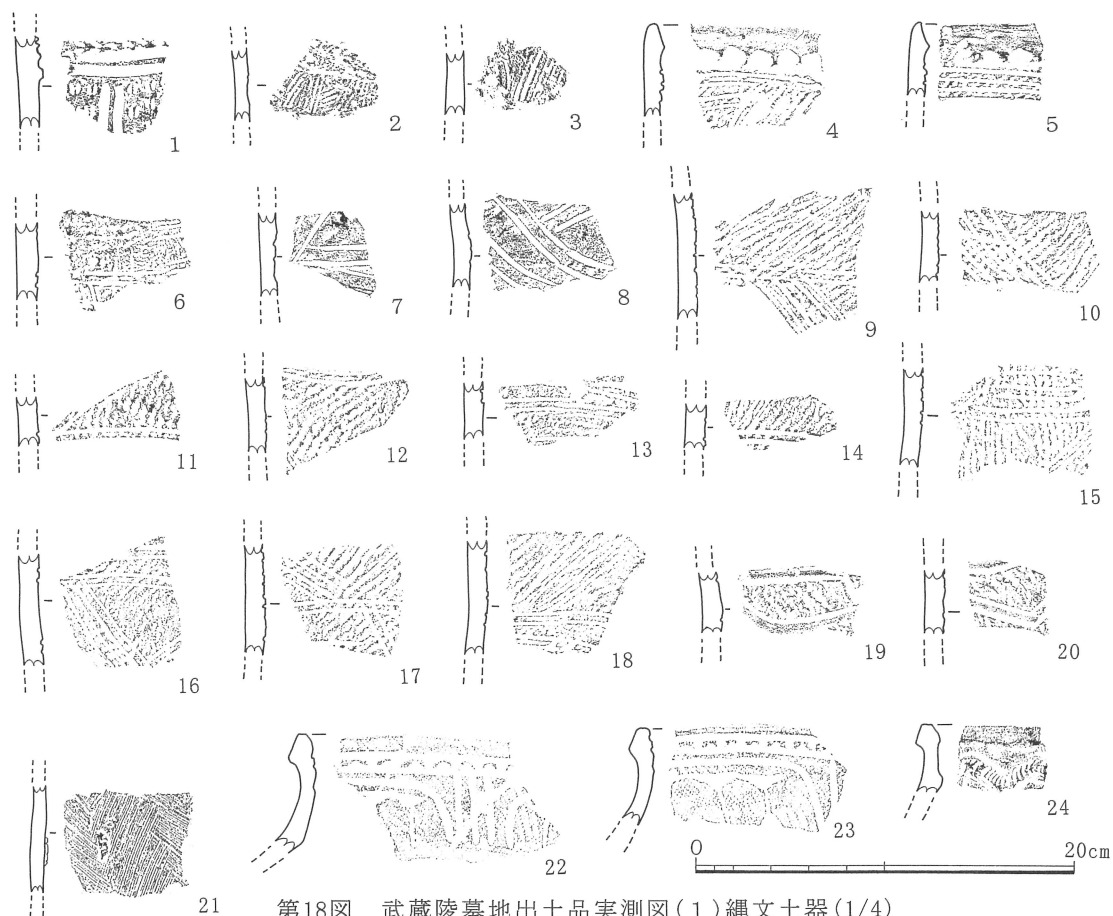
今回の調査で出土した遺物はいずれも小破片が多いが、遺物の所属時期は大きく縄文時代、弥生時代、平安時代の3時期に分けられる。以下、各時代毎の遺物を概観していく。

(1) 縄文時代 (第18図・図版7-3・4)

縄文土器がA地区で数点と、B・C地区で散在的に出土した。特に集中する箇所はなく、この状況は遺構のあり方と一致しているといえよう。

以下、個別に土器の型式を中心に見ていくこととする。

最も古く位置付けられる土器としては、早期の田戸下層式に属すると思われる個体が1点出土している(第18図-1)。表面には刺突と凹線によって文様が施されている。同じく早期に属する土器が数点出土している(第18図-2・3)。小片のため全形は不明であるが、内面のみ、あるいは内外面に条痕を残している。胎土に多量の繊維を含み、貝殻条痕文系と呼ばれる一群の土器と思われ、これらの点から、茅山式に位置付けられる土器群と考えられる。



続いて縄文土器の中では最も多く出土している土器片として、前期中葉～後半にかけての土器型式に含まれると考えられる土器群がある。B-17トレンチを中心に出土した土器は、地文に縄文を施し、横あるいは斜めの深い沈線によって文様を施している(第18図4～20)。個体としては数個体分になると思われるが、いずれも器厚は1cm前後を測る。器種としては深鉢になるものと思われ、口縁は端部を丸く仕上げ、その直下に指頭によって凹文を施す。所属する型式名としては、諸磯c式から十三菩提式の土器群であろう。なお、C-3トレンチで出土した土器片も諸磯c式に含まれる個体と考えられる(第18図-21)。

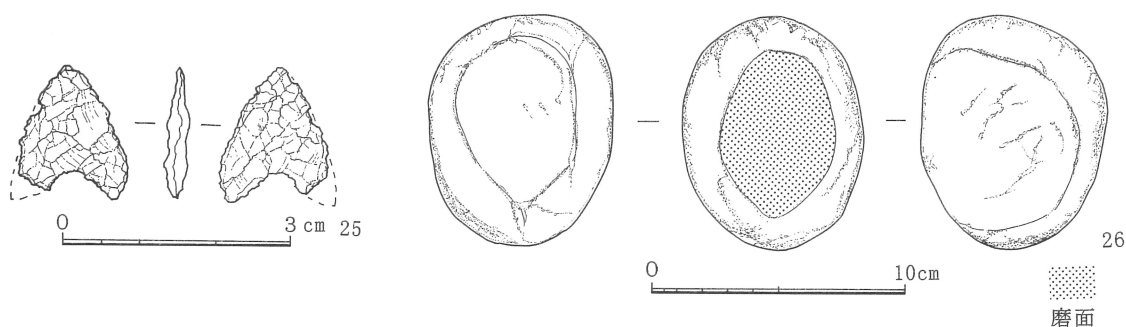
この時期に続く前期末から中期にかけての五領ヶ台式の土器群がわずかに出土している(第18図22、23)。主にB-12トレンチで出土しているが、胎土に金雲母を多量に含むという特徴がある。文様としては地文に縄文を施し、その上に凹線によって文様を描いている。さらに、口縁下に竹管文が施される。

今回出土した縄文土器の中で、最も新しい時期の土器群として勝坂系の土器がわずかに出土している。図化できたものは1点のみであるが、肥厚した口縁直下に粘土帯で隆帯を貼り付け、その上に半截竹管で文様を刻んでいる(第18図-24)。

以上、縄文時代の土器の様相を概述してきた。簡単にまとめておくと、縄文早期に属する土器がわずかに見られるものの、中心となる土器群は前期中葉から中期初頭にかけての土器であり、型式名では諸磯c式、十三菩提式、五領ヶ台式に属する土器である。さらに続く時期として勝坂系の土器がわずかに認められる。この時期の土器が最新の時期を示している。なお、後期、晩期に属する土器は認められなかった。

出土状況としては冒頭で述べたように、住居址のような明らかな定住を示すような遺構が検出されていないことに対応するように、各型式の土器ともまとまった量が出土するというわけではない。これは狭い谷地形という環境からも、長期間にわたって人間が生活する場所には適さないのではないかという想定を可能にする。

なお、この時期に属する石器としては黒曜石製の石鏃片が数点(第19図25)と、磨石(第19図26)1点のみが出土している。この石器のわずかな出土量も土器の状況とよく一致しており、上述したこの遺跡の性格を示しているといえよう。



第19図 武蔵陵墓地出土品実測図(2)石器(石鏃1/1・磨石1/3)

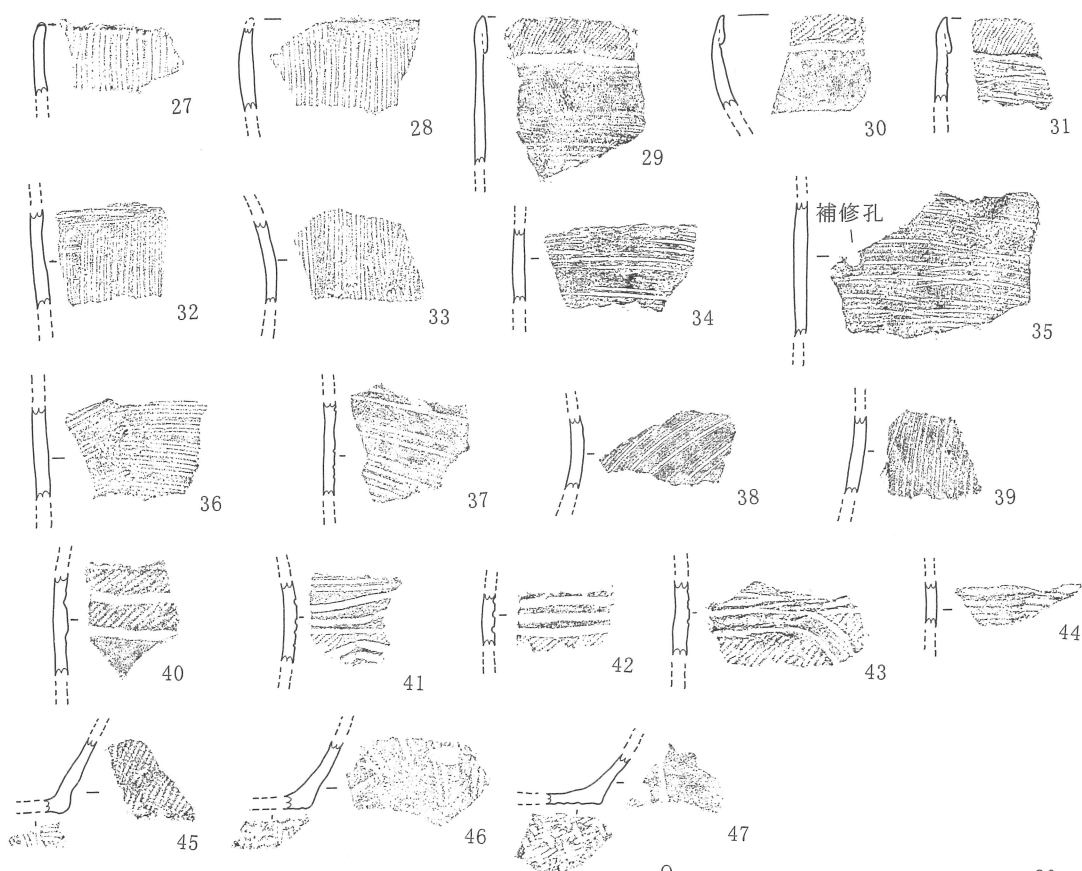
(2) 弥生時代 (第20図・図版7-5)

今回の調査で出土した土器の中に、弥生中期前半に編年される土器群が存在している。土器型式としては須和田式として区分されているものである。出土した地点はB-10・14・15トレンチ付近に集中している。他の地区では出土しておらず、B地区内においてもきわめて限られた範囲において出土した。但し、明確な遺構に伴って出土したものではなく、他の時期の土器と混在した状況でもあった。通常この型式の土器は再葬墓に伴うものであり、八王子市内でも梶田遺跡群、水崎遺跡などで再葬墓という形で出土している⁽³⁾。

全形が判明するような個体はないが、確認できた器種としては細口長頸壺、甕がある。いずれの破片も胎土は精良であり、器厚は5～7mmを測る。

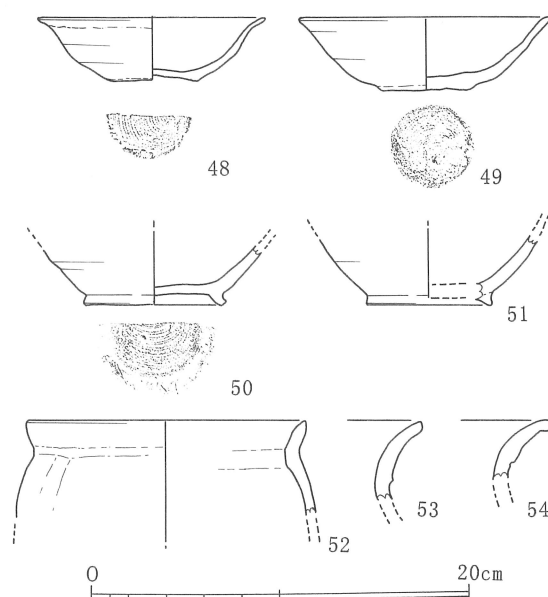
個別に見ていくと甕と思われる個体は、外面の胴部全体が櫛状工具によって条痕を施されている。この甕の口縁は2種類が観察され、指頭によって波状に形作られているものと(第20図27・28)、もう1種類は口縁端部を幅1cm程度折曲げる、あるいは粘土帯を貼り付けて肥厚させ、その上に縄文を施した口縁がある(第20図29～31)。底部の破片はきわめて小さな破片しか出土していないが、網代痕をわずかに留めた個体が認められる(第20図45～47)。

細口長頸壺と思われる個体の破片は、凹線で文様区画線を描き、縄文でその間を充填したものがあ(第20図-44)。この個体も全形を知るには小さすぎるが、他遺跡で出土している個体と同程度の大きさになろう。



第20図 武蔵陵墓地出土品実測図(3)弥生土器(1/4)

今回出土した弥生土器は、冒頭でも述べたように遺構に伴うものではなく、再葬墓の存在も不明である。八王子市内の再葬墓のあり方もきわめて散在的であり、もちろん武蔵陵墓地内に存在していた可能性は否定できない。また、比較的集中して出土した地点には、後述するように平安時代住居址に伴う遺物が重なって出土しているため、調査以前にこの時期の遺構が攪乱されている可能性もあろう。いずれにせよ当該地域において、この時期の遺物が少ないだけに存在が確認されたこと自体重要な資料となろう。



第21図 武蔵陵墓地出土品実測図(4)
須恵器・土師器(1/4)

(3) 平安時代 (第21図・図版7-6)

B-16トレンチで検出された住居址に伴う土器群がある。遺構としては住居址が1棟検出されたのみであり、当該時期の遺物もこのトレンチ付近のみにおいて出土した。出土した器種としては、須恵器坏身、土師器坏、長胴甕がある。須恵器坏身は復元口径12cm程度を測り、器厚は2～3mmと薄く仕上げられている。底面には回転糸切り痕を残している(第21図-48)。土師器坏身には高台が付くものと付かないものがある(第21図-49～51)。口径はいずれも12cm前後であり、底面には糸切り痕を残す。長胴甕は口径15cm程度に復元できる。肩部からすぼまって頸部に至り、そのまま外反する口縁部を付すものである。外面にはヘラ削りが施され、器厚は薄く仕上げられている(第21図-52～54)。

この時期の遺物は全体の量からすれば少なく、伴う遺構も住居址1棟だけであり、長期間にわたって人間が生活したとは考えがたい状況とも合致している。今回出土した当該期の土器は、出土状況からも一括の土器群であり、近接した時期の所産であると考えられる。多摩地域におけるこの時期の須恵器型式編年案によれば、この坏身は口径に比べ底径が小さい形態を示すことから、平安時代(10世紀代)に編年することができよう。この須恵器の編年観から、住居址の所属年代を求めたものである。本遺跡周辺に供給されたこの時期の窯としては、南多摩窯跡群が知られており、今回の出土品もこの窯において生産されたものと思われる。

(4) その他

上記以外の時期に所属すると思われる土器片が若干出土しているので、まとめて報告しておく。まず器壁が非常に薄く、外面にハケによる調整が認められる土器片がB-12トレンチ付近から数点出土している。小破片のため詳細は不明であるが、弥生時代末期の台付甕の可能性はある。1個体分にはとうてい満たない量でしかなく、図化できるような破片もない。よって、この時期の遺構の有無については明確に判断することは不可能である。

また、B・C地区において散在的に肥前系の染付磁器片が出土している。まとめて出土するトレンチはなく、遺構に伴うものとは考えられない出土状況である。破片の中に、コンニャク印

判の手法によって見込みに五弁花の文様が描かれた個体があり(C-1トレンチIIIc下層出土)、江戸中期の所産であろうと考えられる。

以上、今回出土した遺物を所属時期毎に概観してきた。最後に遺物から見た、この遺跡の性格を簡単に記述してまとめとしておきたい。

最も遡る時期の遺物として縄文早期に属する遺物があり、縄文時代においては前期から中期にかけての遺物が中心である。次に、弥生中期前半に位置付けられる一群の土器があり、遺構には伴わなかったため存在理由は明らかではないが、類例の増加として位置付けられる。

平安時代遺物は、唯一明確な遺構として検出された住居址に伴う一括土器であり、この時期谷地形の立地に、単独で存在する住居址の類例として捉えられる。隣接する落越遺跡ではほぼ同時期の住居址が数棟検出されており、この時期の遺跡の拡がりを知ることができたといえよう。

(徳田 誠志)

まとめ

最後に、簡単に今までの調査の経緯と成果をまとめ、今後の展望を示しておきたい。

前述のように武蔵陵墓地は将来にわたって新陵が営建されるところで、地理的歴史的環境から埋蔵文化財包蔵地に含まれる可能性が考えられた。そのため、埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財であればその時期や性格等を探るため、全体を4地区に分け、調査を行った。直接の調査の契機は昭和天皇の崩御に伴うものであり、平成元年1月に実施したものである。

第I次調査はC地区に2本のトレンチで調査した。該地はもともと谷が入り込んだ箇所、南側に設けた2トレンチの北部より以北では、厚い盛土が認められた。この盛土中には近世以降の磁器片などが含まれていた。一方、2トレンチなどでは若干の落ち込みが認められた。これらは表土下のローム層に達していたが、樹根の痕跡などと考えられ、人為的な遺構とは見なしがたいものである。

第II次調査は、第I次調査に引き続いてC地区で実施したもので、対象区域はI次調査区の東側2箇所である。この部分は本来は傾斜地であったところで、一部は切土による平坦面となっていた。ここでも多くの落ち込みが検出された。大半は樹根の痕跡などであったが、用途や時期不明の土坑7基もあった。うち3基は拳大以上の礫を配した、いわゆる配石土坑である。遺物は盛土中から遺構に伴わないかたちで縄文土器1片、土師器?1片、陶器1片、磁器3片が出土した。

次いで行った第III次調査は、A・B・D地区を対象に、トレンチを設け調査を行った。

まず、陵墓地正門に近いA地区では、後世に改変されているものの、本来谷地形をなしていたところで、厚さ1.4m以上の自然堆積層を認めるとともに、一部で現表下2.7m以下のところで地山の堅い層を検出した。また、大正天皇多摩陵西側のD地区は、やや幅広の尾根上ということもあり、遺構の検出が期待されたが、遺構・遺物はまったく確認できなかった。一方、北から延びる尾根を挟んでA地区と反対側にあたるB地区では、他の調査地点では明らかではなかった遺構が検出された。引き続いて行った第IV次調査の成果と併せると、竪穴住居址1棟(平安時代)、縄文時代に属すると思われる土坑と焼土坑各1基、その他時期不明の土坑4基が確認できた。その

他にも、当地方では類例の少ない弥生時代中期の土器がまとまって出土する地点があって、周辺を丹念に調査したが、遺構の検出には至らなかった。第Ⅲ・Ⅳ次調査では縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器など800余片が出土している。

以上の4次にわたる調査の結果、検出された定住的な遺構は第Ⅲ・Ⅳ次調査の平安時代の竪穴住居址1棟のみであった。他に定住的な遺構は認められず、性格や時期不明の若干の土坑が見つかったのみであった。調査地点が本来は谷部に当たる箇所が多いこととも関連しよう。

平安時代の住居址は、陵墓地の東北部に展開する落越遺跡では、谷筋を挟んだ二つの尾根上に計19棟が点在していた。10世紀後半代の集落と理解されている。この時期の集落は、斜度の比較的強い谷状地などにも選地していることが指摘されており、今回B地区で検出された住居址も同様の立地を示すものである。一辺約3mとやや小規模な大きさに、竈を備えている。

出土遺物には縄文・弥生土器や土師器・須恵器などがある。もっとも多く出土しているのは、縄文時代前期後半から中期初頭にかけての諸磯C式、十三菩提式、五領ヶ台式と呼ばれる一群である。落越遺跡では、これらに対応する住居址や集石遺構等も検出されており、地形的条件を勘案すれば、調査密度の精粗はあるものの、両者の関係をうかがうことができる。

弥生時代の須和田式と称される中期前半の土器群は、出土が稀な一群である。再葬墓からの出土例が多いことが指摘されている。落越遺跡でも該期の土器片は出土しているが、調査面積の割には少なく、遺構も確認されていない。

土師器・須恵器は平安時代の住居址の床面からも出土しており、その時期を知る手懸かりとなっている。

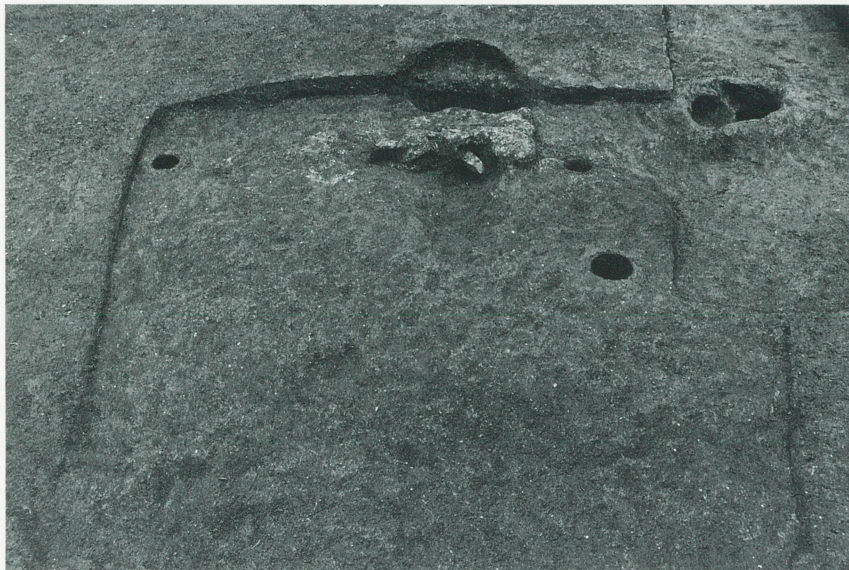
武蔵陵墓地内の調査は樹木等の関係もあり、調査区域も現況では限られている。どちらかといえば、谷筋およびそこに面した斜面が多く対象となっている。遺構は、今までの調査では一部をのぞき、トレンチ等の及んでいない北側の幅広の尾根部などに残されていることも考えられよう。

今後は、それらの箇所にも配慮しつつ、中長期的な視点に立って調査を行い、将来に備えることとしたい。

(福尾 正彦)

註

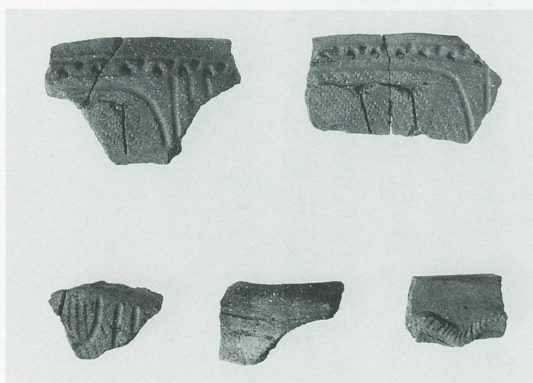
- (1) 昭和2年1月11日付『東京日日新聞』
- (2) 『落越遺跡』Ⅰ(落越遺跡調査団) 1992年3月
『落越遺跡』Ⅱ(落越遺跡調査団) 1992年3月
- (3) 『栢田遺跡群 1978年度調査概報』(八王子市教育委員会) 1979年3月
『八王子市水崎遺跡』(八王子市教育委員会) 1990年3月



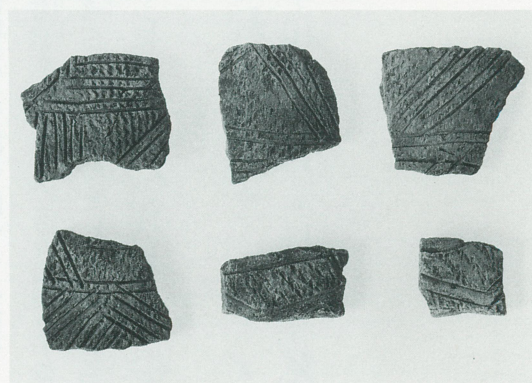
1 武蔵陵墓地 B-16トレンチ住居址全景(西から)



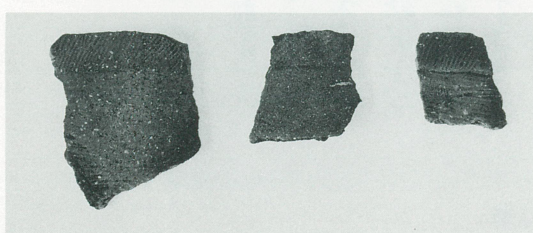
2 武蔵陵墓地 B-16トレンチ住居址竈(西から)



3 武蔵陵墓地 出土品(縄文土器)



4 武蔵陵墓地 出土品(縄文土器)



5 武蔵陵墓地 出土品(弥生土器)



6 武蔵陵墓地 出土品(須恵器・土師器)